

No. 29

ニチメン東京社友会

【目 次】

1、ご挨拶	会長	石原 啓資	2
2、裁決結果報告（2019年度事業報告・収支報告、2020年度事業計画・収支予算）	監事	蛭田 恒美、大羽陽一郎	3
3、会員動向（新規加入者、会費入金状況、長寿お祝い対象者など）	世話人	榊山 俊次	4
4、会員寄稿文			
① ニチメンと私	オリックス(株) シニアチェアマン	宮内 義彦	7
② 写真で偲ぶ故中曽根元総理	大阪社友会	野上 繁	9
③ 世界的に“市民権”を得た「日本BIS協会」		中川 十郎	12
④ ミステリ小説断想（11）		福富 直明	18
⑤ 日本綿花株式会社・横浜支店は生きていた		安武 国章	20
⑥ 野上弥生子の経営三訓		山邑 陽一	24
⑦ マックス・ウエーバーを読む		竹内 可能	25
⑧ ニチメン中国部の思い出		中田 龍彦	28
⑨ “詩吟”喜寿の挑戦		五十川暉夫	36
⑩ メキシコ古代遺跡訪問記		芳賀 信明	37
⑪ 音写と意識		岡島 岩男	40
⑫ コロナ災禍と私のライフワーク事業		吉本 邦晴	44
⑬ コロナ禍と西欧文化		園山 春一	47
⑭ 石橋鎮雄さんのこと		川西 勲	49
⑮ 山頂からの絶景：日光男体山・尾瀬ヶ原		奥村 睦夫	52
5、OB会・OG会・同好会			
① 「黒龍会」開催さる		竹内 可能	54
② ニチメン・マンドリンクラブのご紹介		入江 隆史	55
③ いろは句会（第371回）		佐藤 英二	60
6、訃報（～2020年11月7日まで判明分）		事務局	62
7、社友会役員・世話人一覧表並びに連絡先		広報部	63
8、編集後記		奥村 睦夫	64

会 長 ご 挨 拶

会 長 石 原 啓 資

会員の皆様には大変ご無沙汰致しておりますが、お変わりございませんか？

本年2月頃から新型コロナウイルスにてわが国でも感染者が増え、未だに全国で数百人の新規感染者が報告されている毎日が続いており、会員の皆様におかれましては不安な日々をお過ごしのこととお察し申し上げます。経済優先の動きが顕著になり、人の動きも活発になっている傾向ですが、このウイルスに罹患されぬよう対策を講じながらお元気で過ごしされるよう切に願っています。

会員の皆様がお楽しみにされていた7月開催予定だった総会・懇親会は世話人会の総意にて会員の皆様のご健康を最優先する考えに基づき断腸の思いで中止とさせていただきました。誠に残念ですが、会員の皆様のご健康を察すると開催を実行する選択肢はなかったと思っています。また来る新年賀詞交歓会に関し新型コロナウイルスの現状を勘案すると開催することは困難と、苦渋の決断をさせていただきました。一年間会員の皆様との親睦の場を設けることができなかったことは極めて無念の一言に尽きます。

今回の新型コロナウイルス騒動にて、我々が過去に経験したことがない現象に直面し、驚きと不安に駆られた日々を過ごされていると思います。いつ新型コロナウイルスが終焉するのか？ワクチンが開発され誰もが摂取できるようになれば元の世に戻れるのか？暗中模索の状況では、なかなか前に一步が踏み出せないじれったいお気持ちかと推測いたします。

然しながら内に籠ってばかりでは精神的に参ってくるばかりと思い、感染には充分注意をしながら、元の生活に近づける行動が必要かと感じています。身近でできることを探され実行されることが重要かと思っています。Go To---を活用するのも一つの手かもしれません。新型コロナウイルスが去った後の世の中が、今までと全く異なった社会現象、生活様式等々生まれ出てくるのが、いろんな媒体で報じられています。デジタル化が急速に進むことは間違いないと思います。然し、人と人との接触機会が殺がれてゆくのは寂しい限りです。会員の皆様との絆を維持できる場を設けることが大切だと感じ、来年の総会・懇親会を開催できるよう正常な世の中になるよう祈っています。

会報28号に寄稿致しました「14周年特別企画」を読まれた会員の皆様から、社友会設立には沢山の方々のご苦勞されたことを知ったと、お言葉をいただき「社友会を設立して良かった」と再認識した次第です。既に15年の年月を経たニチメン東京社友会も多々問題が顕著に表れています。会員構成の高齢化、会員数の減少等々にて、会運営の財政が厳しく事業内容等の再検討が必要な状況で、会の継続的運営を前提に世話人会にて議論を始めています。会員の皆様にご相談せねばならぬ時期が来るのではと思っています。その節には忌憚のないご意見ご指導を賜りたくお願い申し上げます。

本年10月25日に双日社友会設立総会が開催されました。コロナ禍の為、限られた人数での開催となり、日商岩井社友会、ニチメン大阪社友会と弊社友会の幹部がご招待いただきました。私

はリモートで参加させていただきました。双日社友会会則によると、設立は2020年4月1日となっております。会員総数は397名にて、20代～80代までの若手中心の社友会との報告をされていきました。会長に加瀬豊氏（元双日㈱社長）、副会長に岡崎謙二氏（元双日㈱監査役）が就任されました。今後、四つの社友会が互いに協力しながらそれぞれの社友会が活動されることになります。会員の皆様にも社友会間の交流にご協力をお願い申し上げます。

現状、年二回発行の会報が会員の皆様との接点ですが、ニチメン東京社友会ホームページは逐次情報を更新して新しいお知らせを行っています。今後世の中のデジタル化のスピードが更に速められること間違いないと思います。会員の皆様もデジタル化に挑戦していただき、社友会ホームページを閲覧し、投稿、ご意見等々をお寄せいただきホームページのご活用にて会員間でのコミュニケーションを取っていただければと思っています。

新型コロナウイルスの終焉がまだ見えぬ不安な毎日ですが、ご健康には十分注意をされお元気で過ごされるようお祈りすると共に、2021年の総会・懇親会では皆様と元気で会えることを楽しみにし、筆をおきます。

[illegible]

会報28号に記載の「決議事項」の賛否について

2020年10月12日

本会の各年度における事業報告、収支決算報告、及び監査報告は、例年であれば総会の議題として議事かけられたうえで、出席者の多数決により承認を受けるべき事項ですが、今年は世界的な新型コロナウイルス感染症対策の影響を受け、7月中旬に開催予定だった総会が中止を余儀なくされたため、「2019年度事業報告・収支報告（案）、2020年度事業計画・収支予算（案）」及び「監査報告書」は、本年8月7日に発行された会報28号に議題として掲載されると共に、会報に同封された返信用はがきの返送により、この議題に対する会員各位の賛否を投じて頂くこととなりました。

その返信はがきの回収結果を、以下の通りご報告致します。

- | | |
|------------------------------------|------|
| 1) 発送枚数 (2020年6月30日現在の会員数)..... | 445枚 |
| 2) 回収枚数 (2020年10月6日現在)..... | 251枚 |
| 3) 回収分のうち、決議事項に賛成 (同意) された枚数..... | 251枚 |
| 4) 回収分のうち、決議事項に否定 (不同意) された枚数..... | 0枚 |

従って、上記３）の賛成数は、有効投票数の過半数となりますので、本決議事項は承認されました。

会員の皆様には、多大なご協力を頂き、誠に有難うございました。

ニチメン東京社友会監事
蛭田恒美
大羽陽一郎

◎ 会 員 動 向

新規加入者（敬称略）

石川満、小川桂、穴田清和、田鎖正浩、秋田久

退会者（敬称略）（2020年度） なし

資格喪失者（敬称略）（会則 11条3項により、会費を2年間以上未払の場合が該当いたします。） なし

連絡が途絶えている方（敬称略）

石川勝美

（連絡先をご存知の方は、事務局までお知らせ願います。）

新入会員募集中

皆様の周りで未加入の方がいらっしゃいましたら是非勧誘いただきたく思います。

本会の会則に同意して、会費を納入頂けるなら会員になれます。

（ニチメン、ニチメンの関連会社に在職したことのある方が対象になります。）

◎ 2020年度(2020年7月～2021年6月)年会費(3千円)入金状況とお願い

2020年9月30日現在

会員数	入金済会員	長寿会員(註1,2)	終身会員	未納会員
441	303	51	8	79

＊ ＊ 2019年度分未納者数 ＊ ＊

3

尚、来年度（2021年7月～2022年6月）年会費 納入済の方→

46

（註4）

お願い：

2019年度会費を未納付の方は当年度会費と合わせ至急の納付にご協力下さい。

2018年度分未納者は資格喪失となります。大至急2019年度分と合わせて納付頂くようお願い致します。

当会会則第11条の規定により2期分の会費未納者は会員資格喪失となります。

振込先は、下記いずれかを利用して下さい。（振込手数料は各自ご負担願います。）

1) 郵貯銀行

口座番号 : 00100 - 4 - 318041

口座名義 : ニチメン東京社友会

（ゆうちょ銀行に口座のある方は、口座間送金を利用すると手数料は無料です。）

2) 三菱東京UFJ銀行 東京営業部

普通口座

口座番号 : 8225155

口座名義 : ニチメン東京社友会 代表 石原啓資

振込に際しましては、振込者名欄にご自身の名前を最初に左詰めに記載願います。

(ネンカイヒ、ニチメン、XXネンドカイヒ等の記載があると振込者名が通帳に記載されず、振込者が特定できません。)

(注1) 長寿会員は年会費免除になっておりますが、長寿会員からご送金を頂いた場合は当
当会へのご寄付とみなし処理させていただきます。**(会運営上大変助かります)**
但し、何らかの手違い等であれば事務所までご連絡下さい。

(注2) 長寿者氏名：(50音順 敬称略)：

青木繁行、石川勝美、市川元久、糸井康雄、伊藤安雄、岩居宏一、宇治田薫、内田英三、
海野敏夫、大久保海生、大塚静子、大西勇、大野久生、大森啓作、河西良治、上条達雄、
亀田昭、川崎恵美子、木内純一、菊池省三、北川敬、古藤彰三、小林斉之助、近藤貞一、
桜井潤一、三分一克美、新野敬一、高瀬裕、高田秀子、伊達邦雄、中谷喜良、西奥薫尚、
西村弘、橋爪覚、平岡昭三、広瀬一彦、深尾孝、福富直明、古川熙、松尾憲一、松田實、
松村信男、松本忠夫、松本寿夫、丸山泰三、水庫博夫、溝江博三、三宅葉、宮田信雄、
望月昌徳、吉田孝生 以上 51名

(注3) 終身会員 (50音順 敬称略)

入江隆史、岩田功、奥村睦夫、唐崎和彦、千田俊章、土橋昭夫、榊山俊次、宮本正博
以上 8名

(注4) 2021年度 (2021.7～2022.6) 年会費納入済会員 (50音順敬称略)：

<<来年度は、振込不要になります。再来年に、22年度分の振込をお願いいたします>>
赤澤宏哉、浅井正彦、浅子豊治、天野雅光、石原啓資、伊藤尚志、入野英次、勝田泰司、
喜多島雄徳、黒住厚、桑島有一、小松繁範、斎藤至弘、菅沼利太郎、菅谷省三、鈴木広明、
陶山晃、高橋正、田尻眞啓、田中弘、津田賢一郎、土橋勇、永井清光、中島和彦、永田堅志郎、
中原正紀、西川周、西川洋、西田昇、野城恒男、野本定男、細谷和夫、秀真正彦、堀江亘、
堀典代、本間登志雄、牧洋生、松本宰子、水野英幸、水堀勤、宮尾迪子、宮尾迪子、本松巖、
安井修司、山岸正雄、山邑陽一、吉木健 以上 46名

(注5) 2020年7月以降で 寄付をいただいた方々

宇治田薫、宇津木長、大久保海生、北川敬、溝江博三、中谷勝(晴美)、水庫博夫、大森啓作、
河西良治、西奥薫尚、石川博保、深尾孝、松村信男、土橋昭夫、小林斉之助

2021年 長寿者お祝い対象者(敬称略)

白寿 (1923年生まれ)

該当者なし

米寿 (1934年生まれ) 21名

石原靖造、今井宏臣、大崎隆三、大谷毅丈夫、笠井公雄、勝田泰司、栗田久彌、斎富造、三枝伸、柴田実、島田俊彦、津田賢一郎、永井清光、西田昇、芳賀信明、林義人、廣田雄太郎、牧洋生、村井靖武、八津道夫、山岸正雄

なお、大変恐縮ですが対象者の名前に漏れ等不手際があれば至急世話人へ連絡願います。



会員寄稿文

ニチメンと私

宮内 義彦

私が日綿實業株式会社（以下ニチメン）に入社したのは2年間のアメリカ留学を終えた帰国直後、1960年8月のことでした。新入社員の8月受け入れは前例がなく、まさに一人ぼつんと入社を許されました。それから在籍したのは3年有余でオリエント・リース（現オリックス）設立のため出向となり新しい会社で働くこととなりました。出向ですからすぐにニチメンに帰るのだとばかり思っていました、予想に反し今日に至るまでオリックスに在籍しニチメンを離れることになってしまいました。人生というのはわからないものです。

オリックスが少し成長した頃、福井慶三元会長から「君もニチメン出身なのだからぜひOB会に入会しなさい」と嬉しいお声がけをいただき、当時のダイエー中内功オーナーと共にこの会に入れていただきました。誠に恐縮ながら会合には出席することなく今日に至っておりますが、いつも会報を読ませていただき昔の上司・同僚の消息を拝見しておりました。

私が入社した当時のニチメンでは、新入社員はまず算盤3級の資格をとることが義務付けられており、4月以降連日始業前の朝8時から算盤教室が開かれていました。入社初日から早速教室に入りましたが時は既に8月。皆さんの多くが3級を取得されており、教室は僅か数名のみでほどなく終了となりました。恐らく私は社内で唯一算盤のできない社員だったのではないかと思います、その後すぐにタイガー計算機が導入され「これで計算できる」とほっと胸をなでおろしたものです。

私は調査部に配属され、そこでの仕事は社長室の下請け、具体的には会社の業績の分析・部店長会議の議事録作成、あるいは対外会議の代理出席など、華々しい商社活動とは縁遠いものでした。平岡さん・東門さん・松村さん等懐かしい先輩の名前が想いされます。長期計画のお手伝いもしました。

当時ニチメンは総合商社5位でしたが、それを何とか3位に引き上げようというプランでした。総合商社が十数社あった中でまだまだ元気であったような気がいたします。当時の商社は米国の色々な事業を見倣って日本へもってこようという動きがさかんでした。例えばスーパーマーケットやリース事業など、今でいうベンチャービジネスです。オリエント・リース設立もそうした一環であり、ニチメンの非繊維部門強化が目的だったのでしょう。

当時初めて海外研修制度ができ、若手社員は皆挑戦しました。私は松島課長から「調査部から受験するのだから、あまりみっともない成績では困る」と言われ慌てて貿易手続きなど勉強して受験をした記憶がありますが、どうしたことか成績が良く、当時の人事担当の豊田常務から「君は試験の結果が良かったので研修の必要がない」というようなことを言われ、まもなく海外赴任待機ポストである海外統括部に異動となりました。「できれば先進国に行きたいな」などと海外への思いを強く抱きながら仕事をしていたことを思い出します。恐らくリース提携先派遣となったのは語学が出来、赴任待ちで暇だろうとみられたのでしょう。サンフランシスコで3か月間研修を受け新しい会社へ出向となりました。

会社が動きだすとその一部となってたくさん仕事を抱え、再三帰るようにとわれながらそうもならず転籍をさせていただきました。そしてニチメンとは大株主としてのお付き合いになりました。当初は資金調達が大きな問題だったのですが、ニチメンが率先して株主保証を出してくれたことでスムーズに会社が立ちあがったことは忘れられません。また当初は全ての営業を機械部等にお願ひしその協力で初めて顧客を作ることができました。機械部の満寫専務・山口課長・水庫さん・与儀君等々忘れられない方々です。上層部から一般社員の方々まで、実に多くの皆様がオリエント・リース

をまさに自分たちで作った会社だという意識を持ち、終始応援をしていただきました。本当に有難い大株主であったと今も感謝の念にたえません。おかげをもちましてなんとか今のオリックスの礎を作ることができました。

私もニチメンを気持ちの上ではいつまでも親だという思いを忘れることなく経営をしてきたつもりです。こうしてニチメンとの温かで親密な間柄が長く続いてきたのだと思っております。この場をお借りいたしあらためまして感謝申し上げます。



会員寄稿文

写真で偲ぶ故中曽根元総理

大阪社友会 野 上 繁

1. 中曽根康弘元総理のご家族と和敬塾・日綿実業の貴重な絆

去る2019年11月29日、中曽根康弘元総理101歳死去の一大ニュースが世界を駆け巡り、全世界がその偉業を偲びました。

中曽根元首相が逝去される27日前の昨年11月2日夜、有難くも小生は大学時代三年間在籍した「和敬塾」特定仲間三名と協力女性二名と共に東京都内の某会員制クラブにて前川昭一（国際ロータリー日本ガバナー会議元議長。前川製作所元社長etc... 92歳）とその長女で中曽根家へお嫁に行かれた中曽根真理子（旧姓前川真理子）及びその兄の前川喜平氏（元文部科学事務次官）をも交え、前川、中曽根家より異例内密の特別招待の榮に浴することが出来た。更に、来る2020年11月（日時未定）にも再度の同メンバーによる内密招待を頂戴しております。（不測のコロナ災禍により延引）



中曽根康弘先生と野上ハナエ
日綿実業・野上繁29歳ペルー赴任前
1965年ごろ

ここに摩訶不思議な上記写真をご覧頂きましょう。トップの一枚目は「青年将校」と謳われた若き日の中曽根康弘先生に中年女性が侍り、写真の上部の説明書きには、「和敬塾南寮昭和35年卒、日綿実業入社昭和35年ハナエ長男。野上繁29歳ペルー赴任

一年前」とある。日付は1965年昭和40年頃となっている。和服中年女性は偶々小生の母親で当時、徳島商工会議所婦人部長としての立場から科学技術庁長官として徳島自衛隊記念式典にご来駕の中曽根先生のご接待を仰せつかったものと見られる。母親は中曽根先生に対し「ウチの息子、繁が日綿実業の南米ペルー駐在員として来年赴任が決まりました！」とさぞ自慢げに余分なことを言ったに違いない。

そして爾来実に53年の歳月が流れる・・・。



長男嫁・真理子様から五三年前の
この写真を見せられ驚愕の中曽根元総理百歳
2018年7月

次の二枚目、三枚目写真は、何と、一昨年の2018年7月、御歳100歳になられた元総理は、長男弘文氏（現参議院議員、元外相）の嫁の中曽根真理子さんから53年前のこのご自分の写真を突然見せられて仰天。元総理は「実に奇遇だね」（万里子さん）と

言われ、その瞬間を直理子さんの粋なお計らいでの撮影に天下の元総理閣下が快諾応じてくださったのがこの写真。これが真理子さんから楽しいお便りと共に送られて参り爾来門外不出の宝として今日に至る。『……賜りました御母上様との写真を父に見せましたら「それは奇遇だねえ」と喜んでおりました。お陰様で年なりに衰えは多々ございますが、週二日程は事務所へ出まして元気でございます。ご厚情に感謝申しあげます……』（中曽根真理子様お手紙原文のまま抜粋。平成30. 7. 20付）

水茎のあと麗しき直筆達筆のこのお手紙の中で真理子さまは更に、実父の前川昭一さん（91歳当時）も皆様のお陰でとても元気であること、文中に日綿実業ペルー時代のことも言及され、また現参院議員弘文氏夫人として、ご長男康隆氏（現衆議院議員）の母としてもご多忙の中で頑張る真理子様の心意気も感じられ実にうれしいことでありました。敬愛する前川、中曽根ご一家との接点の場で昔も今も何かと話に出て来るのは「日綿実業、ニチメン、双日」であり、決して他の商社が話題に上がることはない。

2. 前川、中曽根家へ「ニチメン佐武博司リハビリ頑張り物語」を報告。

一昨年の2018年6月10日、われわれ和敬塾を卒業した四国支部塾友四名と協力女性二名は和敬塾塾長前川昭一様と中曽根真理子様を高松山中の粋な隠れ家「山」並びに高松「郷屋敷」へご案内し、両場所にて貴重な懇親の一時を持つことが出来た。この時の準備舞台と協力女性二人による洗練されたソフト接遇は一級品であり世界を知る昭一様真理子様含め我々一同が感じた爽やかな謝意は今も消えず。しかし昭一様真理子様と共に全員の印象が最も強かったのはその時の全員の相互の懇親会話報告内容の重みと楽しさでありました。小生報告に絞れば何故か後半は「ニチメン佐武博司リハビリがんばり物語」に絞られ、これに同席



前川昭一様・中曽根真理子様歓迎
高松山中隠れ家「山」にて2018.6.10
和敬塾塾友会四国支部 野上繁・渡辺優・
平見勇雄・中村進

の和敬仲間も昭一様真理子様も身を乗り出し御傾聴賜る結果となった。佐武さんの頑張りに感銘を受けた小生のつたない報告に一同がかくもご理解下さったことは小生の大きな喜びでありました。

この2018年6月10日「山」での懇談時に小生が同席全員にお渡しした佐武資料は、「わがりハビリ（2017年7月）」「小浜小学校講演記録（2018年7月）」。更に2019. 11. 2 東京赤坂Ark Hills Clubでのお招きに当たりては、下記資料を事前送付：（お届け先：中曽根元総理へ（真理子様通じ）。前川昭一様、前川喜平様）

- 1) 野上からの佐武博司氏横顔説明書及び佐武博司氏より元総理、昭一様、喜平様への挨拶状（この中で中曽根元総理の東大、代議士時代通じての最大の親友、早川崇代議士（和歌山出）の小学時代の恩



2019年11月2日 赤坂Ark Hills Club
佐武博司著「チャレンジド魂」と共に
後列右より前川喜平・中村進・渡辺優・
梶原美和・三野暉子・三條亜紀子
前列右より平見勇雄・中曽根真理子・
前川昭一・野上繁

師、佐武孫八郎の息子が佐武博司であり
た奇縁報告の佐武博司書信添付)

- 2) 橘昌平編著「早川崇・その生涯と業績」
中の部分コピー (A 4 班21枚) 野上手配
(この中に中曽根康弘、早川崇ご両人の親
密度を報ずる写真、記事極めて多し)
- 3) 佐武博司渾身の力作著書『チャレンジ
ド魂』の全員宛謹呈。

☆本書はこの時点で真理子様より中曽根元
総理の下へ。

3. OB友愛組織としての「ニチメン大阪社 友会」の誇り

ご存知通りこれ以上なき厳しい身体事故
逆境の中でこれまでリハビリで復帰に頑
張ってきた佐武博司氏の横顔は、『日綿実業
(ニチメン) 現「双日」昭和33年入社。大
阪市大卒。65-71年米国New York 79-
81年Nigeria Lagos駐在。退職後に人財紹
介会社サブスリーコンサルティング経営中
の2012年に頸髄損傷の突発事故により重度
の両手足麻痺。爾来、医療医師、関連介護
施設の全面協力と本人の強い意志によりリ
ハビリ苦闘結果、要介護5より1へ奇跡的
復活。現在、新兵器相棒ロボットウオー
カーの助力を得て完全復活へ懸命の日々』。
ここで最大の支えとなったと思われるのは、

①に佐武氏天性のCharacter (性格)、②
に戦後復興への厳しい時代を海外駐在の舞
台で職務全うした自信とキャリア、③に自
分を今も支えてくれる豊かな家庭環境。

この3点が結実した自然結果として「ロ
ボットウオーカー」に巡り合う幸運に恵ま
れ、今日の意欲の毎日に至る……。こ
の上記一つでも欠ければ意欲の今日はあり
得ずこれは佐武博司という男の「人生総合
力の勝利」と小生は考えます。

『ニチメン大阪社友会のサポーターの存在』:

佐武氏を含む我々は大阪社友会 (会長、
岡崎謙二、会員数485名) 及びニチメンア
メリカ会 (会員数60名) 会員でもあり、こ

れに仲間組織、同東京社友会 (会長、石原
啓資、会員数456名) が繋がる。逆境で今
なお頑張る佐武さんの姿に感銘を受けた
我々五体満足生き残り企業戦士シニアは
自然発生的に「佐武サポーター軍団」(写真)
を結成、このメンバーたちが更に平均年齢
84歳の老剣士「とくしま阿波踊り出陣2019
七人の侍」(辻井準一、松村信男、吉本邦晴、
野上繁、山口秀夫、小上馬昭雄、岡崎謙二)
へと発展した。(大阪社友会会報No.25
2019 NOV.) 常に我々が敬愛する隊長の辻
井準一大先輩は何と前川昭一様と同年齢92
歳を誇る。これも何たる嬉しき奇縁であり
ましょうか。これら現状の全ては来る2020
年晩秋の東京懇親の席で前川、中曽根ファ
ミリーへも自動的に報告される。中曽根家
の中曽根弘文氏 (現参議院議員、元外相)
及び長男の若き中曽根康隆氏 (現衆議院議
員) にも有難い繋がりが広がることになり
ましょう。

このように、ニチメン企業戦士、佐武博
司氏の頑張りに感銘を受けた我々に和敬塾
の絆が取り囲み、それを暖かくご理解賜る
前川、中曽根ファミリー。

これら要素の集積が起爆剤となって更なる
新たなご縁に繋がることは感謝すべき人
間愛の物語だと思えてならない。

現世は世界中が我々の在籍した日綿実業
—ニチメンの時代からは何もかも模様変り
の時代になって、参りました。それだけに
往年の我々企業戦士生き残りは、生ある限
りご縁と仲間を大切に、手を取り合って



ニチメン大阪社友会 佐武サポーター
左より松村信男・辻井準一・吉本邦晴・
野上繁・佐武博司

一方、民間企業の方でも、世界市場がボーダレスとなり、国際競争が激化するなかで、国際市場での競争優位を目指し、諜報機関や軍の諜報の手法を企業のビジネスに活用する競争情報（Competitive Intelligence）の研究が始まりました。競争情報の収集を徹底的に行い、自社、自国の競争優位獲得に活用しようと努力し始めたのです。

それに先駆けて、米国「競争情報専門家協会」SCIP（Society of Competitive Intelligence Professionals）がCIA、NSAなどの情報専門家、学者、実業家などにより、1986年にバージニアに設立されました。現在SCIP（Strategy and Competitive Intelligence Professionalsに名称変更）は会員3,000人に達し、毎年行われる米国での情報会議には約500人が参加しています。

日本ビジネスインテリジェンス協会の設立の契機は、1989年に私がこのSCIPのニューヨークでの情報研究会にスピーカーとして呼ばれたことに端を発しています。ビジネス分野でインテリジェンスの必要に関して超大国に最も近い存在は、日本の貿易会社つまり総合商社ということになり、当時米国ニチメンのニューヨーク本店開発担当副社長だった私に白羽の矢が立ちました。以後私は、ワシントン、ニューオリンズなど毎年のように米国で講演、帰国後、1992年「日本競争情報専門家協会（SCIP）」を設立しました。

同時期に私は処女作ともいえる『CIA 戦略情報読本 リアル＝ワールド・インテリジェンスの世界』（H.E.マイヤー著、中川十郎／米田健二訳／ダイヤモンド社／1990年）を出版しました。本書は、企業に対し、戦略情報の真の活用の仕方について指針を与え、情報洪水からいたずらに溺れることを救う目的で書かれています。

著者のハーバード・E・マイヤー氏は、1971年から81年まで『フォーチュン』誌の副編集長として、国際経済ならびに国際政治の専門家として活躍。1982年1月にCIA

長官特別補佐官としてレーガン政権に登用され、1983年1月には国家情報評議会副議長に任命されました。

情報は経営戦略を立てるために使う

——「日本競争情報専門家協会（SCIP）」の設立総会&記念シンポジウムはとても盛会だったと聞いています。

中川 溜池山王の全日空ホテルで、産学官協力のもとに行われた、「日本競争情報専門家協会（SCIP）」の設立総会&記念シンポジウムは約300人の方に参集いただき大盛会でした。SCIPのアメリカ本部の会長、副会長が来日、フランス、スウェーデン、オーストラリアなどのSCIPの会長にも来日いただきました。

しかし、「日本競争情報専門家協会（SCIP）」は翌93年には「日本ビジネスインテリジェンス協会（BIS）」に名前を変えることになります。

それには2つ理由があります。1つ目は、第1回の設立総会をやってみて、日本では「競争会社の情報を収集する」ことに関しては、企業側もマスメディアもあまり良い感触をもってなく、協力が得られないことがわかったからです。また、私は「競争情報」という言葉には当初から懐疑的でした。大事なものは、「あくまでも自分の会社の経営戦略をしっかりと確立することで、そのうえで、競争相手の情報を参考にすればよい」と考えていたからです。

2つ目の理由はもっと論理的かつ本質的なもので2つにわかれます。1つ目は、今日の急速に変化しつつあるハイテクノロジーのビジネス環境下では、自社に大きな損害を与える会社は2年前までは競争相手でさえなかった（名前も知らなかった）ということが多くなったことです。もう1つは、グローバル化した現在では、すべての競争相手が同じ経済的環境のもとで活動しています。従って、この環境全体を理解す

ることから、さらにこの環境のもとでさまざまな力がそれぞれの競争相手にどのように影響をおよぼしているのかを、把握することから、大きな利点が得られます。

競合情報の収集だけに焦点を当てることについて、私が根本的に問題とするのは、それは能動的ではなく、受動的だからです。競争相手に注意を注ぐことしかやっていなければ、いつも競争相手のイニシアティブに反応するだけになってしまいます。そのため常に遅れをとり、追いつくのにあぐさくしなければならなくなります。

世界は競争情報研究と経済情報研究の2つにわかれる。

「日本競争情報専門家協会 (SCIP)」のその後ですが、2001年4月に前田健治元警視總監がSCIPJapanを設立して意欲的な活動を展開、2006年の中断を挟んで、2008年2月に新たに「日本コンペティティブ・インテリジェンス学会 (CI)」と名前を変えて、現在に至っています。私は2001年から顧問として名を連ねています。今年8月に行われた「日本ビジネスインテリジェンス協会 (BIS)」のセミナーは「日本コンペティティブ・インテリジェンス学会 (CI)」と共催で行い、同学会の最高顧問の松平和也氏と菅澤喜男名誉会長（前会長）にも講演していただきました。

現在、世界のインテリジェンス研究は、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、イギリス、アメリカ（UKUSA協定の5カ国、「ファイブアイ」）と中国などが推進する「競争情報」研究 (Competitive Intelligence・CI) と日本、フランス、スウェーデンなどが推進する「経済情報」 (Business Intelligence・BI) と大きく2つに分かれています。

日本では、本のタイトルに「情報」が入ると売れない

——日本ビジネスインテリジェンス協会設

立から約30年が経過しようとしています。当時と比べて現在の環境に大きな変化はございますか。

中川 奇しくも今はまさに約30年前と同じです。当時は米ソの対立があり、現在は米中の対立があります。また、当時すでに、日本の大企業は商社を筆頭に、世界に100を超える支店がありました。しかし、競争情報、経済情報などインテリジェンスに関する教育は行われていませんでした。民間企業に関わらず、経産省・ジェトロ、外務省・大使館などを含めて、現在も状況はまったく変わっていません。面白い話で、出版社に言わせると、日本では本のタイトルに「情報」と入ると売れないそうです。

私は2、3日前に鳩山由紀夫元総理に同行して、中国安徽省合肥で開催の「世界製造業大会」(元ドイツ大統領で中小企業世界連盟のグローバル会長のクリスチャン・ウルフ氏が大会宣言) に出席して帰国したばかりです。合肥には、中国を代表する理系重点大学の「中国科学技術大学」があります。同大学は中国そして世界のAIのメッカです。ノーベル賞クラスの学者が集合、電気自動車や人工知能 (AI) 用の半導体に巨額の資金を投じている様子がよくわかりました。

本大会に参加して、日本企業のビジネスインテリジェンスの無さを痛感しました。大会は9月18日～23日まで開催され、フォーチュン・グローバル500社から100人以上の幹部と製造業内外企業の約500人の代表を含め、4,000人以上が参集しました。しかし、日本からは企業はもちろん、有識者の数も少なかったです。大会は総額4,470億人民元 (701億9,000万ドル) に上る430件以上の投資プロジェクトを調印、大きな成果を上げて幕を閉じました。来年は、ヨーロッパ勢の独壇場とせず、日本企業もぜひ参加いただきたいと感じました。

参加会員累計は2万名、登壇した講師は累計500名

——日本ビジネスインテリジェンス協会(BIS)のこれまでの活動についてお聞きします。延べ会員はどのくらいですか。会員のエピソードもご披露ください。

中川 現在の会員は約200名で、これまでの累計参加会員は約2万名に達しています。

2カ月に1回の例会は28年間1度も休んだことはありません。毎回約70名の有識者が参集されます。これまでご登壇いただいた講師は約500名です。会員は初回から約166回のうち、150回以上ご参加いただいている、91歳のドクター中松義郎先生を始め、素晴らしい方々ばかりです。

中松先生とは私が商社でニューヨーク駐在中の1988年にお目にかかり、以来31年間、公私ともにお世話になっています。現役の方のお名前を挙げるときりがないので、ここでは、残念ながら、鬼籍に入られた先生方の思い出を振り返らせていただきます。

まずは石川昭先生(青山学院大学名誉教授、大学院国際政治経済研究科の初代科長)です。先生には2000年以来16年間、BIS顧問として、長年にわたってご指導をいただきました。2011年2月には、日本ビジネスインテリジェンス協会(BIS)創設20周年と研究会開催100回を記念して共編著で『知識情報戦略』(税務経理協会刊)を出版しました。

同書は2013年には英訳され、シンガポールのWorld Scientific社から“An Introduction to Knowledge Information Strategy ~ From Business intelligence to Knowledge Sciences ~”の書名で出版されました。BIS20年間の情報研究成果が英文で発信され、海外でも好評を博したことを今でも思い出します。

豊島格先生(日本貿易振興機構・ジェットロ理事長、世界貿易センター会長、エネル

ギー庁長官、アブダビ石油社長、丸善石油副社長)も忘れることができません。1975年に駐在先のブラジル・リオデジャネイロでお目にかかって以来、お父上が私と同郷の鹿児島出身であったこともあり、40年近く目をかけていただき、情報の専門家の紹介などでご助力をいただきました。

1974年にリオデジャネイロ総領事、76年にサンパウロ総領事を務められ、以来約40年ご指導をいただいたのは、スーダン大使、ウルグアイ大使を務められた平野文夫先生です。私がブラジルで主宰していた「ブラジル経済研究会」で顧問をお願いし、帰国後はBIS顧問に就任いただきました。外務省関連では、兵頭長雄先生(欧亜局長、ポーランド大使、ベルギー大使)も忘れることができません。ベルギーよりご帰国後の2000年から17年間、BIS顧問としてご指導をいただきました。

郷里の先輩でもある米盛幹雄・時評社会長にはBIS顧問として、20年に渡りご指導をいただきました。義理人情に篤く、温厚でいつも笑顔を絶やさない人格者でした。宮脇亮介・中曽根内閣初代広報官(元皇宮警察本部長)には、20年近く情報研究でお世話になりました。

中川さん、今ちょうど真上に 銀座・和光があります

最も印象深かったのが小野田寛郎・元陸軍少尉(財)小野田自然塾 初代理事長)との出会いです。1977年にブラジルのリオデジャネイロ駐在中に御縁ができ、以来37年間に渡り、BIS顧問として、情報研究で親しくご指導をいただきました。小野田元少尉の口癖は「情報が正しいか否か、精査すること」「偽情報に注意せよ」でした。小柄で物静かな紳士でしたが、鋭い眼光が印象的でした。小野田元少尉についてはエピソードがたくさんありますので、いくつかご披露いたします。

日比谷で一緒に地下道を歩いていた時のことです。突然、「中川さん、今この真上にちょうど銀座・和光があります」と言われました。自分の歩幅と、それまで何歩歩いたかで計算をしておられたわけです。驚いて、近くの階段を上ると目の前に和光がありました。90歳になるまで、階段は必ず2段ずつ上り、体を鍛えておられました。

小野田元少尉には、何度となく拙宅にお泊りいただいたことがあります。お風呂を提供すると使用後、必ずきれいに風呂掃除をされ、翌朝はベッドもシーツやカバーもきちんと片付けられ、家内ともども恐縮したことを思い出します。

小野田元少尉の著書「たった一人の30年戦争」（東京新聞社刊）は、英訳され“My Thirty Years War（わが30年戦争）」として、今も米国海軍兵学校の教材となっています。

しかし、日本の防衛大学校で教材として使われたとは、寡聞にして聞いていません。

国際的には私の情報研究の恩師たるスウェーデン・ルンド大学のステバン・デジエル博士に長年にわたりビジネスインテリジェンスのご指導をいただきました。

デジエル博士は1972年にルンド大学に世界で初めて「ビジネスインテリジェンス講座」を開設。ビジネスインテリジェンスの創始者と言われております。1990年10月にパリで開催された世界情報会議に講師として招聘された私は同じ会議に参加しておられたデジエル博士との運命的な出会いがありました。その時の御縁がもとでルンド大学の情報論講師として、たびたび招待される榮譽に預かりました。私は人生におけるデジエル博士との出会いに深く感謝しています。

30周年記念に向けて中国との関係を強化——過去も現在も、錚々たる皆さまが会員になっているのですね。BIS28年の歩みもご説明いただけますか。数多くの海外視察団を出し、数多くの分科会などが開催されています。

中川 先ほど申し上げましたように、1992年に溜池山王の全日空ホテルで設立総会&記念シンポジウムが盛大に行われてから約10年後の2001年に、10周年記念行事として、キューバに18名の視察団を出しました。BIS研究会にお見えになっていた馬淵睦夫先生がキューバ特命全権大使になられたご縁です。

現地では1週間滞在し、とても歓迎いただきました。また20周年記念行事として、『見えない価値を生む知識情報戦略』（石川昭、中川十郎編著／税務経理協会刊）を出版しました。

今30周年記念に向け、時代の潮流が東アジアに向かう中で、BISとしても中国との関係を強化しています。2017年8月には、BIS関係者が河西省九江、北京を訪問、2018年には、1月に天津に18名の視察団、4月に楊凌、7月に「一帯一路」・「伝統医療」研究にスリランカ、コロンボ、9月に山東省・潍坊市、内蒙古、大連、11月には楊凌・西安に50名の大型使節団を派遣しました。2019年は、9月に浙江省浦江県に20名の使節団（BIS会員は6名）、同じ9月に大連そして安徽省合肥を訪問しました。

私は現在、中国天津市河北区人民政府より招商大使、産業発展顧問、陝西省人民政府より一帯一路陝西友愛研究所副会長、山東省・青島市貿易顧問など数多くの海外顧問を委嘱されています。これらはいずれも、大学教授としてではなく、日本で唯一のビジネスインテリジェンス研究機関である、日本ビジネスインテリジェンス協会（BIS）会長として迎えられています。今、まさにBISは世界的に“市民権”を得るに至りま

した。

世界で唯一の

「メディカルインテリジェンス」を研究

——最後に、読者にメッセージやエールをいただけますか。

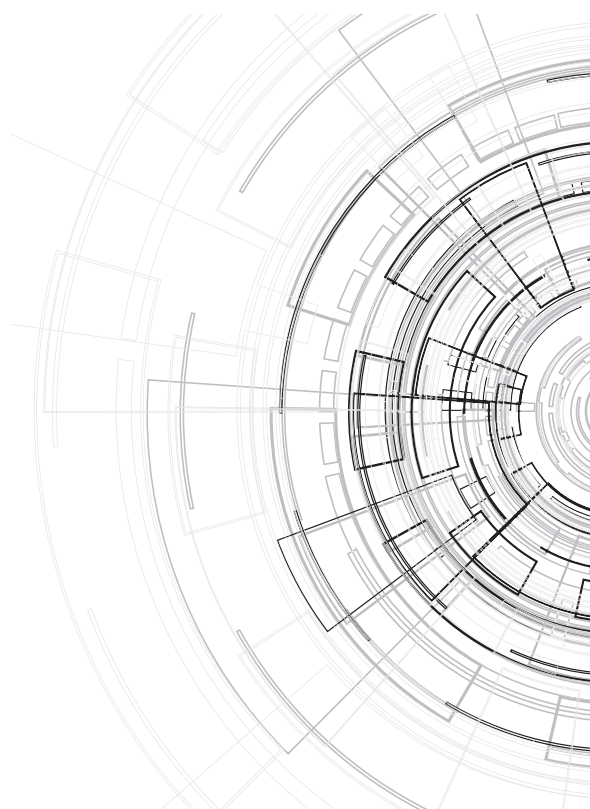
中川 日本では中・長期を見ずえるインテリジェンスが不足しています。それは、日本の企業構成社員の中心は課（課長）であり、戦術レベルで仕事の方向性が決まってしまう、部長や役員まで上がって情報が昇華することがないからです。インテリジェンスが生きるのは、戦術レベルではなく、戦略レベルです。戦術が戦略に至らない最も大きな原因は、日本では情報教育が不足しているためと思われます。

読者へのメッセージですが、今後も、さらに多くのやる気のある若い有識者にBISに参加してほしいと願っています。最後にBISでは、「人生100年時代」を予見、20年前から世界で唯一のメディカルインテリジェンス研究組織「国際伝統・新興医療融合協会」（会員100名、中川十郎 理事長）を設立。BIS名誉顧問の廣瀬輝夫先生（ニューヨーク医科大学名誉教授）のご指導のもとに国際的な健康医療情報の共同研究を続けていることを付け加えさせていただきます。（金木 亮憲）

中川 十郎（なかがわ・じゅうろう）

鹿児島ラサール高等学校卒。東京外国語大学イタリア学科・国際関係専修課程卒業後、ニチメン（現・双日）入社。海外駐在20年。米国ニチメン・ニューヨーク本社開発担当副社長を経て、愛知学院大学商学部教授、東京経済大学経営学部教授、同大学院教授、2006年4月より日本大学大学院グローバルビジネス研究科講師、ハルピン工業大学国際貿易経済関係大学院諮問委員。米国コロンビア大学経営大学院客員研究員。中国对外经济贸易大学大学院客員教授、同大学公共政策研究所名誉所長、WTO-PSI貿

易紛争パネル委員。JETRO貿易アドバイザー。日本ビジネスインテリジェンス協会会長。米国競争情報専門家協会（SCIP）会員。中国競争情報協会国際顧問。日本コンペティティブ・インテリジェンス学会顧問。天津市河北区人民政府招商大使、産業発展顧問、世界銀行CSR（企業の社会的責任）コンサルタント。オリンパス株特別委員会委員。日本貿易学会理事。国際アジア共同体学会学術顧問（前理事長）。一带一路陝西友愛研究所副会長などを歴任。2014年に東久邇宮国際文化褒賞を受賞。主要著書として、「よくわかる商社業界」共著（日本実業出版社）、「貿易と海外投資の分析と実務」共著（文真堂）、『国際経営戦略』共著（同文館）、「北東アジアのグランドデザイン」共著（日本経済評論社）、「東アジア共同体と日本の戦略」共著（桜美林大学北東アジア総合研究所叢書）、「CIA流戦略情報読本」共訳（ダイヤモンド社）、「グローバル企業の情報組織戦略」共訳（エルコ社）。『成功企業のIT戦略』共訳（日経BP）、「知識情報戦略」編著（税務経理協会）など多数。



会員寄稿文

ミステリ小説断想(11)

福 富 直 明

会報No.26に寄稿したとき、ダシール・ハメットの“Red Harvest”が7回翻訳されていると書いたが、その後、田口俊樹さんの新訳が出た。1953年に最初の翻訳が出て以来、8回翻訳されたことになる。田口訳の邦題は『血の収穫』、旧訳では『赤い収穫』だったこともある。社友会の諸賢にはなじみの薄い小説だと思うが、1929年に出版されたこの作品は、ハードボイルド小説の始祖的な古典だ。初めて読んだのは73年ほど前の高校時代だった。冒頭の“I first heard Personville called Poisonville by a red-haired mucker named Hickey Dewey in the Big Ship in Butte. He also called his shirt a shoit.”と、それに続く主人公の“私”の視点で見たパーソンヴィルの警官たちのだらしない姿の描写の意味ををどうにか読み解いて、わくわくした記憶がある。

主人公はハメットのほかの作品にも登場する男だが、名前は不明。Continental Detective Agencyのoperative(調査員、工作人員の意)であることからコンチネンタル・オブと呼ばれる。40歳で、身長1.7m、体重86キロ。常に彼の視点の一人称で語られ、ハメットは彼の心理や感情など内面描写を徹底的に排除しているので、彼がどんな口調・表情でしゃべったのか、読者は自分で読みとらねばならない。主人公の“私”が笑った、怒った、泣いたと、くどくど書かれた抒情的な小説と比べてみると、ハメットのハードボイルドの文体の凄さがよく分かる。彼の文体がアーネスト・ヘミングウェイに影響を与えたという伝説があるほどだ。

オブは街の新聞社の社長に呼ばれてパーソンヴィルに来たのだが、面談の直前に社長は射殺される。社長の父親の鉱山会社の

持ち主がオブに街の浄化を依頼する。第一次大戦後の不況時の労働争議のスト破りに雇ったギャングがそのまま居座り、警察は腐敗してパーソンヴィルはポイズンヴィル(=毒の村)と化していた。オブは浄化の仕事を引き受け、奔放に動き回る。警察の悪徳署長がギャングを挙げるつもりだというと、オブはその情報をギャングに流す。お礼のつもりか、ギャングが八百長ボクシングのネタを教えると、オブは街のあちこちで言いふらして掛け率を逆転させる。署長も浄化されねばならぬひとり、彼の部下が背後からオブを撃つと、オブはその警官を射殺するのだから、オブが無節操で無軌道な男に見える。彼の狙いは、腐敗した警察、ギャング、密造酒屋、故買業者など街を牛耳る悪の組織の対立を煽り、争わせて共倒れに追い込むことだった。再読してみて、目まぐるしい展開を組み立てたハメットの構想力にあらためて感心した。

あとがきの解説者は、作家の筒井康隆が「『血の収穫』のプロットは、あらゆる小説、映画、劇画に流用されている。その数、おそらく百をくだるまい」と指摘していること、また、黒沢明監督の映画『用心棒』もその一つで、監督が「ほんとは(ハメットに)断らなければいけないくらい使っているよね」と語ったと述べている。

この作品を最初に紹介したのは江戸川乱歩だった。乱歩と言えば、子供向きには『少年探偵団』の作者で、最近になって岩波文庫にも収録されている作品もあるが、大人向きには『人間椅子』『屋根裏の散歩者』『蜘蛛男』など、かなりいやらしい小説を書いた人だ。小学生時代に誰かから大人向け

の作品を借りて読んで、この本を読んでいるのがばれたら叱られるなど思いながら、こっそり読了した。彼のいやらしい作品群は昭和ひとけたの”エロ・グロ・ナンセンス”の風潮の時代に書かれたもので、戦後になって彼は“改心”した。1946年に「戦争前“エロ・グロ”といふ言葉が流行し、私の探偵小説もその代表的なるものの一つとして、心ある向きより非難攻撃をあびせられていた。私は態と時流に迎合したわけではないが、少くとも子供なども読む程度の低い大衆娯楽雑誌にセンジュアル且つグルーサムな探偵小説を書いたことは非常にいけなかったと悔んでゐる。今後はさういふあやまちを再び繰返さないつもりである…」とある雑誌に寄稿した。そして、戦争で空白になっていた時代に英米ではどんな作品が出ていたのか精力的に調べ始めて、海外ミステリの研究・紹介者として活躍した。戦後の2、3年はおかしな時代で、洋書の正規の輸入の外貨枠は限られていたが、進駐軍の基地から読み古しのペーパーバックが神保町、渋谷、六本木などの古本屋に出回っていて、アメリカの小説類が結構入手できた。乱歩も古本屋で発掘している。彼が誌上で紹介した作品を捜し歩くのは楽しかった。

乱歩は『随筆 探偵小説』(1947)のなかで、“Red Harvest”を『血の取り入れ』という仮題で取り上げて、アンドレ・ジイドが称揚した作品と知って、一読してみたが、推理小説ではなく、機関銃撃合いのギャング小説だと断定している。さらに、オプの行動には極端な違和感を持ったらしく、手厳しい批判を述べた。

「この探偵のタフといふことが次第に倫理性を欠くが如き方向を採って行き、現在のハード・ボイルド派作品は犯人以外の登場人物までも殆んど倫理観を持たず、探偵や警官さへも含めて、朝も酒、昼も酒、…(中略)…酒と女と殺人、この三つのものが凡て享楽として取扱はれ、

そこにあるものは、もはや謎と推理の興味ではなくて、全く別の面白さである。こういふ作風がアメリカ大衆に歓迎されてゐる理由はよく分るが、若しこの勢ひがクリスティー、クイー、カーなどの作風を壓倒して、その餘勢が欧州にまで及ぶとすれば、本来の推理小説のため甚だ悲しむべきことである」

つまり、犯罪者が倫理観に欠けているのは当然であっても、探偵までが倫理観を持っていない作風が広がったら大変だと乱歩は真剣に憂慮しているのだ。オプの表面的には無節操な行動が、実はポイズンヴィルを浄化するための毒を以て毒を制する意図的な手法だったとは考えず、オプもほかの登場人物同様の悪党だと誤読してしまったようだ。

1953年に早川書房から『赤い収穫』が出版されたとき、乱歩が解説を書いている。あとがき・解説というものはその作品の面白さとか特異性を強調して、読者の関心をあおるのが普通なのに、乱歩は「どうもハードボイルドのアメリカ式リアリズムといものが好きになれない」と書いている。あとがき解説にこういうネガティブなことを書くのは現代では珍しい。上記の引用文にあるような刺々しい激昂調は沈静化しているが、それでも、“誤読”だったとは認めていない。誤読ではないとしたら、どんな目的であろうと探偵たるものはが恶しき手段を使うのは倫理に反するという視点で、嫌ったのかとも解される。彼のいうアメリカ式リアリズムなるものも把握しにくい表現である。

彼はハードボイルド派作品には”謎と推理”がないと指摘した。彼が言う”謎と推理”はアガサ・クリスティーやエラリー・クイーンの作品に出てくるような犯人当て、あるいは密室殺人の解明といった類いの古い型の探偵小説のテーマとなった”謎と推理”で、作中のあちこちに手掛かりがさりげなく書かれていて、結末で探偵役が手掛

アーレンス商会の3階建て赤レンガの事務所・倉庫等の建物を日本政府から譲り受け、出張所を支店に昇格させた。当時、アーレンス商会横浜支店はホテル・ニューグランドの斜め前に位置しホテルの中庭から支店建物が良く見えたと言う。

アーレンス商会は、1869年（明治2年）、東京・築地に薬品や染料等を取り扱う外商として設立され、1873年（明治6年）横浜に支店を開店した。



①アーレンス商会

関東大震災

1923年（大正12年）9月1日、正午頃、関東地方に大地震が発生。昼食の支度で火気を使用していた時間帯であった事も加わり、関東一円建物の倒壊・火災による被害は甚大であった。

当社、横浜支店の被害は、元アーレンス商会から引き継いだ建物及び倉庫が倒壊、諸帳簿及び関係書類は全焼した。また、倉庫に保管中の様々な原料及び製品の総てを焼失した。損失額は保管中の商品等、資産300万円、その他、間接的な被害として、米国の得意先に対する売約済み生糸の未船積み分の買埋による値合金損失、回収不能手形、売掛金切捨て損、有価証券の値下り損等々で100万円と見積られ、合計で損害見積額は総額400万円であった。この損金のうち、250万円は別段積立金を流用し残りの150万円は、前期繰越利益金及び当期（第62期）の利益金によりこれを埋めた。経済的損失の他、当社の人的被害は、社員・雇員合わせ12名の諸氏が犠牲になられた。

アーレンス商会＝高田商会＝日綿

明治初期に於ける日本の貿易は、外商と称された商館による独占状態にあった。明治政府は1880年（明治13年）政府機関が外国製品を調達する場合、邦人による貿易会社（内商）を通じて行なう旨の通達が出された。これに伴い武器・機械等の輸入を中心にしていた独国のベア商会は、廃業に追い込まれた。その為、同商会の番頭であった高田慎蔵氏と英国人ジェームス・スコット氏、そして、アーレンス商会の代表アーレンス氏の三者の出資により1881年（明治14年）高田慎蔵氏を代表者とする内商・高田商会が誕生した。富国強兵を掲げ近代化を推し進めていた当時の日本の情勢は、追い風となり1894年（明治27年）の日清戦争で同社は巨額の利益を上げた。

しかしながら、関東大震災により当社同様に社屋の倒壊、商品の焼失、為替差損等多額の損害を被り、1925年（大正14年）経営が破綻し整理会社となった。その後、整理案がまとまり第2次「高田商会」が設立され、戦後まで機械専門商社として活躍してこられた。1963年（昭和38年）総合商社化を目指していた当社は、機械専門商社「高田商会」を吸収合併した。

横浜支店の自社ビル建設



②新築時の当社ビル
（正門玄関真上に社章の分銅マーク）

関東大震災により大きな被害を蒙ったが生糸を中心する商いが順調に進展した事により、横浜市中区日本大通り34に地上4階、

地下1階、鉄筋コンクリート構造、建築面積382㎡、延床面積1953㎡の自社ビル（事務所・倉庫）を建設することになった。礎石にMCMXXVII A.Dとローマ数字で刻印されたものが有り、1927年には外構が出来上がっていたと推測される。建築設計を依頼したのは、近畿を中心に数多くの商業ビルを手掛けておられた渡辺節氏であった。渡辺氏は1884年（明治17年）11月3日、東京都千代田区に生まれ、東大建築学科を卒業後、鉄道院に入り京都駅舎等（後に焼失）を設計された。

退官後、1916年（大正5年）大阪に設計事務所を開き商業ビルを中心に数多くの作品を誕生させた。

関西地区に現存する主な建物は、大阪商船（神戸市中央区）・大阪ビルヂング（大阪市北区）・綿業会館（大阪市中央区）等である。同氏が携わった作品として、横浜に現存するものは、当社ビルのみである。同ビルの外壁は、水平方向に削りを入れた褐色のスクラッチタイルで神奈川県庁本庁舎と同じ仕様で仕上げられており、昭和初期流行りの建築様式であったことがうかがえる。

綿花ビルの竣工は、1928年（昭和3年）2月である。

戦後の横浜支店

当社ビルは、戦災を免れ無傷のままで残り、ロケーションが良かった事もあって戦後、米軍進駐と同時に横浜の司令部として接收された。皮肉にも第一次世界大戦では戦勝国として独国のアーレンス商会所有の建物を我国が接收したが、今度は敗戦国となった我国が米国によって逆に当社ビルが接收される事になるとは、テレビ・ドラマ「半沢直樹」の世界のように倍返しされたような気持である。退去後は、新しい事務所を求めて市内の女学校、横浜正金銀行内の一室、或いは、生糸検査所内等を転々と移転せざるを得なかった。1953年（昭和28年）、生糸取引業務の本拠地を再び横浜支店

に置くことになり高級絹織物、生糸の輸出では、業界第1、2位の実績をあげるまでにいった。

輸入業務では、食糧庁向け米国産小麦、綿花、化学品の輸入を行う一方、鉄鋼、木材、機械等の国内販売にも力を入れた。1960年（昭和35年）10月から「三和ビル」で営業。その後、業容の変化に伴い新しい事務所「銀洋」に移転した。しかし、生活様式の変化や化学繊維の伸長等から生糸・絹織物取引が衰退し業績不振で1966年（昭和41年9月）支店から出張所へ変更し、食糧関係の輸入業務のみを行っていた。1988年（昭和63年）8月、内需景気の回復と共に首都圏の一角を担う横浜地区の経済が拡大したことから再び支店に昇格。



③三和ビル
（中区伊勢佐木町）



④銀洋ビル
（西区北幸町）

2003年（平成15年）、日商岩井と合併するまでの期間に就いては、分社化、統合など変動が大きく、資料の組織的な収集・管理・公表が少なく、今後の追跡調査が必要である。

生きていた綿花ビル



現在の綿花ビル
⑤正面玄関



⑥外観－1



⑦外観—2

向かって左「旧日本綿花横浜支店事務所棟（現・THE BAYS）」

右「旧日本綿花横浜支店倉庫（現・横浜市役所別館）」

尚、倉庫棟は、中区区役所の別館として使用されている

戦後、進駐軍によって接収されて以降、横浜支店の綿花ビルは、どのような変遷を経て今日に至ったのか歴史を紐解いてみた。

1. 1954年（昭和29年）日本政府が進駐軍より買取る。
2. 1960年（昭和35年）「事務所棟」は関東財務局、「倉庫棟」は労働基準局庁舎として使用された。
1993年（平成5年）両庁舎が横浜第二合同庁舎に移転した後、
3. 1997年（平成9年）から横浜地方裁判所建て替えの為、仮庁舎として使用。
4. 2003年（平成15年）横浜市が日本政府からビルを取得。
5. 2005年（平成17年）横浜トリエンナーレ（現代アートの国際展）会場として一部使用される。
6. 2006年（平成18年）から2010年（平成22年）までは、文化・芸術の創造拠点ビルとして

「ZAIM」の名称で活用された。（元関東財務局が使用した関係からこの名称のビルとなった）

7. 2013年（平成25年）事務所棟部分は、横浜市指定有形文化財として登録された。
8. 横浜市は、事務所棟部分の活用化を図る為、事業者からの一般公募が行われ応募者9社の中から「横浜DeNAベイスターズ」が選定された。

9. 2017年（平成29年1月）ビルの名称を「THE BAYS」とした。

因みに、同社の利用状況は、一階は、横浜スタジアムから移転してきたショップであるが応援グッズに止まらず、日常生活で使われる日用品を販売する「プラス・ビー」とカレーライスやベイスターズオリジナル醸造のクラフトビール等を販売する「カフェ・アンド・ナイン」が有る。二階は、主にクリエイティブ企業や大学の研究室、個人のクリエイター等が使用するシェアオフィスとなっている。

三階は、会議室と多目的スタジオ、四階は、球団事務所として使われている。

日本大通り周辺の散策

この大通りは、明治3年頃完成した日本初の西洋式街路で重厚な歴史的建物が建ち並ぶ大通りで銀杏の葉が黄色に染まる頃の並木路は、素晴らしくドラマのロケ地に選ばれるほどの大通りである。周辺には、神奈川県庁舎（King Tower）・横浜税関（Queen Tower）・横浜開港記念館（Jack Tower）の三大タワーが見られる。また、横浜球場、山下公園、大栈橋（大型客船・飛鳥の母港）、外人墓地、グルメの中華街等々がある。是非とも綿花ビル（横浜市指定有形文化財）を尋ねに「みなとまち」へ来られませんか。

交通機関：

- *みなとみらい線「日本大通り駅」より徒歩1分
- *京浜東北・根岸線「関内駅」より徒歩8分
- *横浜市営地下鉄「関内駅」より徒歩7分

会員寄稿文

野上弥生子の経営三訓

山 邑 陽 一

本稿は筆者が大分時代（2000－2006）に執筆したものです。

「日田・竹田、臼杵・杵築に宇佐・佐伯」といえば口調がいいが、大分県の見どころは、まだまだこれではおさまらない。このほかにも「山は富士、海は瀬戸内、湯は別府」とうたわれる別府や、中津・大分のような町があるし、海・山・川など自然の美しさは格別である。

そのなかでも、臼杵は歴史的な風情を残す静かな町のたたずまいが愛される有名な観光地の一つである。この町に生まれた著名な人物に、明治生まれの文豪野上弥生子がいる。市内にある小手川酒造の二代目の長女として生まれ、99歳まで現役の作家として活躍した。市内には野上弥生子文学記念館があるし、彼女が東京に住んでいた家に移築した「野上弥生子成城の家」もある。

東京にいた野上弥生子は、夏目漱石の教えをも受けて文筆を執る傍ら、臼杵の名門フンドーキン醤油のオーナーとして、その経営に関与した。その間、同社の社長を東京に呼んで、いつも次の三点にしばって、経営の状態を問いただした。すなわち、「お味噌の味はよいですか」・「社員の給料は十分ですか」・「銀行の借入れは減っていますか」というのである。

「お味噌の味はよいですか」というのは、いまでいう「顧客満足」であって、これを最初に質問したことは、野上弥生子の経営感覚の正しさを証明している。最後に出てくる「銀行の借入は減っていますか」というのも、日本経済の現状をみれば、これが重要なチェックポイントであることは明らかである。今や多くの銀行に不良債権が山積し、借り手の責任だ、いや貸し手の責任

だと、大騒ぎになっているからである。とくに過大な借金を抱えて行き詰まった企業が多すぎる。銀行借入れを減らすことに絶えず努力しながら、本当に金が必要なとき・採算に十分自信がある事業をするときに、最低必要額を借りるのが堅実経営である。

ところで、銀行の借入れは減らしながらも、社員には十分な給料を支払え、というのはなぜか。とくに後者を前者に優先させて、二番目のチェックポイントにおいているのはなぜか。社員に十分な給料を支払うことは、企業としてどのような意味があるのか。企業業績改善のための常套手段としての人件費の削減は、企業経営者が避けるべきことなのか。とりわけ、どのような経営をすれば社員に十分な給料を払い続けることができるのか。こういった疑問について筆者は考え続けてきた。本稿はこれに対する筆者なりの、現時点における解答である。

心理学者マズローが提唱した「自己実現」という考え方は、大変よく知られている。とくにかれの欲求断層説は有名である。かれは三角形を描いて5段階に分け、最下段に「生理的欲求」、その上の層に「安全への欲求」、さらにその上の層に「社会的欲求」、さらにその上に「尊敬への欲求」と記し、最上層に「自己実現への欲求」と記した。人はそれらの欲求を最下層から順次上層へと満たしていき、最後に人の欲求の最高段階としての自己実現欲求をもつに至るという。

この説を社会科学の分野に応用する場合には、最下層の「生理的欲求」は「生存への欲求」と書き換えることが必要である。「生理的欲求」は心理学が対象とする個々の自然人の欲求であるが、個人と社会との関

りを研究対象とする社会科学では、個人の最も基礎的な欲求は、個人が属する社会の中での「生存への欲求」として現れるからである。以下ではそのように置き換えた上で、論を進めたい。

このマスローの欲求段階説については、最上段の自己実現という概念が、とくに経営学において愛唱されている。経営体あるいは経営体中の個々の組織の目標とそれに属する個々の経営者ないし従業員の自己実現の目標とが一致するとき、経営体・組織に属する個人は最も幸福感を感じるし、経営体・組織は最も効果的に目標を達成することができる。このように経営体や組織を運営することが、理想的な経営だという主張からである。

この現在の有力な主張に対して、筆者は異議なく賛意を表したい。そして以下ではこれを基に議論を展開したい。しかしながらマズローの欲求断層説の優れている点は、最上段の自己実現にだけあるのではなく、それに至るために踏むべき段階を、4段に分けて明示した点にあると思う。とりわけ、生存への欲求が実現され確保されなければ、個人は自己実現への欲求を実現することができないのである。

[illegible]

會員寄稿文

マックス・ウェーバーを読む

竹 内 可 能

この夏さる新聞の読書欄を見ていたら、偶々ドイツの社会思想家マックス・ウェーバーに関する新書が、期せずして二つの出版社から同時に刊行されたことを知った。その一つは岩波新書によるもので著者は今野元、題して「マックス・ウェーバー」、副題に「主体的人間の悲喜劇」とある。もう一方は中公新書で著者は野口雅弘、同じく

生存への欲求を充足するためには個人の努力もさることながら、個人が属する国家や企業による保障が必要である。生存権の保障は日本国憲法など近代国家の憲法に多く見られるが、企業は国家よりもさらに直接に、個人の生存権に関与する。企業の存続のために最も基本的な要求は利益の確保である。企業が利益を確保してこそ、従業員に十分な給料を支払うことができ、従業員は十分な給料を受けてこそ、企業内で自己実現に励むことができる。従業員が自己実現をしてこそ、企業の収益も向上する。この関係は「生涯一エンジニアでありたい」といい続けてノーベル化学賞を受けた田中耕一氏と、雇い主である株式会社島津製作所との関係に、その例をみることができる。企業と従業員の間にこの関係が成立すれば、自己実現ができなかった社員は、それのできる職場を求めて企業を去っていき、企業内で自己実現ができる社員は、十分な給料を得て、それに励む。

野上弥生子のいう「従業員の給料は十分ですか」という質問は、そのような関係が企業内に成立しているかどうかを問うたものと、筆者は考える。

「マックス・ウェーバー」、副題に「近代と格闘した思想家」とあった。どちらも今年この思想家の没後百年を記念してのものである（彼の没年は1920年）。

わたしは早速近くの本屋に駆け込んで、発売したてのこの二冊を買い求めた。思えばわたしがニチメンという貿易商社に入社したのは1960年という年だった。周りの真

面目な学生なら安保闘争に明け暮れていたことだろうが、わたしはそういった思想や運動にあまり興味はなく、ただただ高度経済成長によって我が国の復興を目指すだけの、当時の言葉でいえばノンポリと言われても仕方ない学生だった。

しかし当時とはといえば、読書界も言論界もこぞって左翼系（マルクス系）の思想によって席捲されていたようだった。とりわけ安保闘争に激しさが募るなか、デモ中の東大女子学生が機動隊の犠牲になったときのことが、今も苦々しく思い出される。マックス・ウェーバーが生まれたのは1864年だから、生誕百年を記念していろんな刊行物が出回ったのも、安保闘争の真最中それも1964年頃のことではなかったか。わたしの記憶の中にマックス・ウェーバーの名前が刻まれたとすれば、多分このころではなかったかと思う。

あの当時、東大には丸山真男という当代切っの政治学者がいて、安保闘争を支持する知識人の一人として持てはやされていた。それにもう一人東大には大塚久雄というこれまた高名な社会学者いて、丸山の政治学、大塚の史学などと並び称されていたものだ。マックス・ウェーバーの研究は主に大塚久雄によって始まったらしいが、丸山真男も早い時期からウェーバーで論壇をにぎわしていたことは有名である。

早めに申し上げておかなければならないが、マックス・ウェーバーというドイツの社会学者（経済学者にして政治学者でもある）は決してマルクス主義者でもなければ、左翼系でもない。わたしに言わせれば明らかなドイツ国民・国家主義者である。かく申し上げながら私自身、これまでの人生の中でマックス・ウェーバーの著作に触れたこともなければ論じたこともない。今度手にした二冊の新書を読み終えて初めてこの思想家の何たるかを知ったところである。注目すべきことは、マックス・ウェーバーという国民・国家主義的な思想家がわが国

の読者に受容されるのは、不思議なことに、丸山真男とか大塚久雄といったどちらかといえば左翼系の学者を通して行われたことであった。

歌謡曲の謳い文句に「歌は世につれ、世は歌につれ」というのがある。上記したような新書二冊を読み終えた読後感として、わたしはこの歌謡曲の謳い文句を思い起こしていた。思想も政治も同じように世につれ、世もまた思想や政治につれて漂浪するものだが、しかしそれは10年単位での話というものだ。それに比べて百年という年月の経過はただごとではない。どんな思想も政治も、それを生み出した人が誰であれ、没後百年という年月を生き残ることはできない、というのが私の率直な印象であった。ことほど左様にわが国はともかくとして欧米における読書界では、ウェーバーという思想家は過去の人になりつつあるらしい。

マックス・ウェーバーという、当時から「知の巨人」とまで謳われてきた思想家だが、今に残る著作といえば「ピューリタニズムの倫理と資本主義の精神」ぐらいか（無論わたしは読んだことがない）。それとて今に語り継がれてきたものは、「鉄の檻」という彼に着せられたメタファー（暗喩）ぐらいのものではなかったか。つまりは資本主義世界に住まう民衆は、あたかも鉄の檻の中に閉じ込められたも同然で、がんじがらめの官僚制・管理体制の下で自由がないというもの。そうした議論じたい今なら陳腐なものに思えるが、1960年代新進気鋭の左翼系学者なら、資本主義への批判的な議論として歓迎したのが時代というものだったのかも知れない。

冒頭の新刊書のそれぞれの副題、「主体的人間の悲喜劇」そして「近代と格闘した思想家」が示しているように、彼の思想の根源に流れるものは、あくなき闘争心だったように思える。そしてその闘争心を支えていたものは、畢竟するに、ダーウィニズム（適者生存）とエリート主義（高踏主義）だっ

たのではなかろうか。

丸山真男は日本のアカデミズムとジャーナリズムの橋渡しを演じたといわれるが、マックス・ウェーバーの場合も、丸山同様アカデミックな世界でも、またジャーナリストとしても八面六臂な活動を展開していた。しかし彼が丸山と決定的に違うのは、同じ政論であっても彼の場合は常に主体的で闘争的な自己主張であったということだ。

マックス・ウェーバーについての具体的なケースに興味がある読者には、既述の新刊書を手に取ってお読みいただくとして、ここにわたしが触れておきたいことがある。それは他でもない、先ほどわたしは彼のことをドイツ国民・国家主義者と申し上げたのだが、その彼とヒトラーの国民社会主義（ナチズム）との関連である。

アドルフ・ヒトラーという、当時まだ無名の男がドイツ労働者党（DAP）に入党したのは1919年のことだという。その翌年つまり1920年この党は国民社会主義労働者党（NSDAP）、即ちナチ党を名乗ることになる。繰り返しになるがマックス・ウェーバーが没したのはこの年のことだから、先ほども記したように彼はマルクス主義者でもなければ社会主義者でもない上は、こうしてヒトラーやナチズムとは物理的にも全く無縁だったことが知れる。

にも拘らず今では（恐らくは戦後一早くからではないかとも思えるが）、マックス・ウェーバーという思想家は、なぜかヒトラーやナチズムの国民社会主義との間に奇妙な親和感を覚えさせる。何故だろうか。早い話が前掲の「マックス・ウェーバー」の著者今野元にしてから、わざわざアドルフ・ヒトラーとの関連に終章を充てているのである。

この終章によると、E・ノルテという学者は『その時代におけるファシズム』（1963年初版）なる著作の中で、ウェーバーの著す『国民国家と経済政策』の文言は、ヒトラーの『わが闘争』にあっても不思議のな

いものだと言っていること、さらには国民社会主義の思想的先駆として、マルクス、ニーチェと並んでウェーバーをも挙げていることが紹介されている。言いえて妙なる評論ではないかと思う。ナチ党が名乗る「国民社会主義労働者党」だが、恐らくヒトラーの時代、彼の頭の中にあったものは社会主義でもなければ労働者でもなく、国民国家による全体主義、つまりファシズムだけだったはずだ。

一方、ウェーバーはといえば、ドイツが第一次世界大戦の敗戦国に墮し、過酷な賠償金を課せられて悪夢のような事態を迎えていた折、彼は信条とする国民・国家主義、つまりはドイツ統一主義をもって政治の世界を呻吟していた。しかしこのころ既に彼の体は精神疾患に蝕まれ、余命は尽きようとしていたのである。何べんも申し上げるように、彼はマルクス主義や社会主義とは相容れない思想家であり、更には全体主義など憎悪の対象以外に考えもつかなかったろう。しかし上記のようにドイツ国民・国家主義という一点に絞れば、双方に共通する理念がなかったとも言い切れない。そこにもし彼が56歳というような短命でなく寿命を全うしたならば、ナチズムやヒトラーの前で彼は如何なる言動を以って応じただろうか、いやがうえにも推論は尽きない所以である。

わたしは先にヒトラーとウェーバーとの間の奇妙な親和性について触れたが、そのことについて一言解説して本稿を脱したい。

それはドイツという国が、中世以来数百年もの間抱き続けてきた、あの古代ローマ帝国の末裔としての矜持を捨てることができなかったことと関連があるのではない。神聖ローマ帝国そのものは、1806年ナポレオン将軍によるライン同盟の結成であえなく抹消させられはした。その後幾多の変遷をへて1871年、鉄の宰相ビスマルクによるドイツ帝国の成立（わが国の元勲、伊

してお小遣いが支給された。当時のニチメンの人事部はケチメンの権化のような存在で、この120元は全てニチメン人事部の召し上げとなり、CASH JOURNAL上で本社からの入金として処理するように指示があった。余談だが当時、中国対外貿易部（中国の部は日本の省に相当、以下“同部”）の招待で三井物産から5人の語学研修生が北京語言学院に留学していた。同部からのお小遣いは三井物産本社が召し上げることなく、留学生が自分で自由に使ってよいとのことだった。

当時の中国元には2種類のお金があり、中国人民が使う人民幣（人民元）と外国人が外貨を人民元に交換した時に交換される外貨兌換券（外匯兌換券、Foreign Exchange Certificate = 略称FEC *注1）の2種類があった。

従い、外国人が航空券や汽車のチケットを買う、中国の外国人相手の商店で何かを購入する、ホテル代の支払、レストランでの食事代金の支払等は、全て外貨兌換券でないと支払が出来なかったもので、同委員会から頂いた人民幣は支払先に大きな制約があり、実はこの人民幣120元を毎月会社のお金として使うのは非常に苦勞した。



外匯兌換券、Foreign Exchange Certificate 100元と50元



同右、1角(0.1元)、5角(0.5元)、1元、5元、10元、100元

北京留学前に、松村誠三中国部長（故人）と住山忠雄さん（故人）のご招待を受け鈴木君も呼ばれて夕食を共にする場を設けて頂いた。この場が初めてお会いしたニチメン中国部の先輩方だった。お二人とも大変温和との印象を受けた。このお二人とはそれからニチメンの会社人生の中で非常に親しくまた楽しく仕事をさせて頂くことになる。

1980年8月末に、筆者は留学同期の鈴木敏朗君と共にJALで北京に向かった。当時、中国ではロクなカメラもないだろうからと父がキャノンの一眼レフを渡してくれ、自分が何時も使っていたバカチョンカメラの2台を持って北京に向かった。北京空港で通関の際に、外国人と雖も中国へ持って入れるカメラは1台だけで、もう1台は北京空港税関が没収すると言われ非常に困った。最終的には北京空港税関にカメラ1台を拘留（＝税関預かり荷物）3か月以内に持ち帰るよう言われたので、次回出国時にピックアップして日本に持って帰ることにした。北京空港の外で出迎えに来てくれていた濱本北京所長（故人）と藤田長期出張員にその話をする、日本に近々戻る人間もいるだろうからその人に帰国時にピックアップしてもらい、日本に持って帰ることにすると伺い安心した覚えがある。何故なら、筆者は中国留学の1年間は一切中国から出ることは出来ないと人事部から言われていたので、北京空港税関の3ヵ月の拘留期間を過ぎると没収されてしまう為である。

留学は北京語言学院（＝現、北京語言大学）で北京の学院路にある外国語専門大学である。同大学は元々中国人学生に外国語を教える目的で設立された大学であり、1978年中国の最高権力者である鄧小平がスタートした改革開放政策が始まる前までは、中国人学生しか在籍していなかった。中国の改革開放政策により、外国人にも門戸を開き、同大学で中国語の基礎を身に付けてから、中国の他大学へ進学する為の学校で

もあった。1980年9月時点で北京語言学院に在籍していた留学生は350名、中国人学生は200名で外国人留学生の方が多いという学校だった。留学生の内、日本人が120名（企業派遣70名、一般留学生50名）で留学生では日本人が最大勢力だった。

1980年当時、ニチメン北京駐在員事務所は北京飯店3階の3024号室に事務所を構えていた。1981年4月末に北京飯店の14階の1422号室に事務所引っ越し、我々留学生3名も猫の手位にはなろうかと思い引っ越しのお手伝いをした。事務所の広さは3倍になり、14階だったので故宮（紫禁城）や景山公園・北海公園を見下ろすことが出来た。留学当初の所長は濱本さんだったが、同年11月に松村さんと交代された。この頃は松村さんと濱本さんのお二人は入れ替わりで北京所長と東京本社中国部長を交替されておられた。松村さんも濱本さんのお二人とも大阪外国語大学中国語学科のご卒業で、松村さんは濱本さんの1年先輩とお聞きしている。このお二人とは以来長い付き合いとなった。

1年の北京留学を終えて、筆者は当時の元所属先であった鉄鋼貿易第1部鋼板第2課へ戻り、鉄鋼貿易業務に戻った。中国とは面白い国で、そこで働いている時は苦しい現場から早く解放され帰国したいと思うのだが、少し離れるとまた行きたくなるという不思議な国でもある。上司に早く中国に駐在に出して欲しいとお願いをして1982年7月に業務本部中国部へ移籍、そこで3ヵ月の業務研修を受けた後、同年10月にニチメン北京事務所上海出張所に赴任した。上海では5年間駐在したが、赴任中に所長は榎原さん（故人）、萩原さん、工藤さん（故人）と2年毎で交替されていた。

実は、筆者はニチメンで初めての中国家族帯同駐在員の第1号であり、それまでの駐在員は全て単身赴任であったので、駐在

期間も短く2年毎に駐在を交代する制度になっていた。この制度は逆に言えば2年間日本に戻るとまた中国駐在の順番が回ってくることを意味する。ある中国駐在員の任期が明けそうになると、中国部からまた駐在員を出すことになる。当時の中国部長は机の中に仕舞ってあるニチメン社内中国語要員一覧表を見て、次の駐在員を誰にしようかと熟考している様子をよく見かけた。それを見てそろそろ自分の番が回って来たかなと思ったりしたものである。口の悪い人は、「中国部はタコ部屋だ！親方が今日はこの現場、明日はこの現場と指示を出し、ひょいひょいと現場に向かうような職人のタコ部屋のようなもの」と言っていた。何故かと言えば、当時の中国はビジネスでも生活の面でも全て中国語しか通じず、何をするにも中国語が喋れることが必須だった。英語では到底駐在の任務が果たせないことから、特殊言語要員の中国部要員が何時も中国駐在に出る必要があった。現在の中国ではナショナルスタッフに日本語や英語が堪能な人とビジネス相手も外国語が堪能な人が増えたので、中国語が喋れなくとも駐在業務がこなせるようになった。

榎原茂樹さん（故人）は筆者が1982年10月1日に中国上海に赴任した時の最初の所長である。業務ではないが榎原さんとの上海の思い出は国慶節休みの時に、榎原さんの発案で榎原さん・藤田剛君・中田の3名で安徽省にある黄山の登山を行ったことである。榎原さんは大学時代ワンダーフォーゲル部所属で山登りがご趣味だったので黄山を発案されたのだと思う。現在は黄山に行くには高速鉄道（CRH＝中国版新幹線）で上海駅から黄山駅まで僅か3時間前後で簡単に行けるが、1982年当時は上海駅から杭州駅へ夜行列車で移動、杭州駅からタクシーで黄山に1日掛りで移動する方法が最速且つ最短ルートだった。上海から列車に乗り杭州へ移動、杭州でタクシーをチャーター

ターして黄山（＊注2）に向かった。当時黄山にはロープウェイはなく、全てを自分の足で上り下りする必要があった。黄山には三主峰と呼ばれる蓮花峰、光明頂、天都峰の他69の海拔1000m以上を超える峰がある。東山魁夷は、黄山を「充実した無の世界。あらゆる山水画の技法が、そこから生まれたことが分かる」と評している。眺めるだけなら素晴らしいと感激していればよいだけだが、この山を登ることは多数の峰を登ってはまた下り、また登っては下るといふ苦行が待っている。中国の有名な山は石造の階段を上り下りするのが殆どである。登山中、雨も降ってくるわ階段もツルツル滑るしで危険極まりない。3名とも膝が痛くなり、自分の荷物さえ持てない状況に陥り、黄山を同行した頑強のタクシー運転手に荷物を持って貰って登山と下山を繰り返した。記憶が定かではないが黄山の中で2泊したと思う。現在は黄山にはロープウェイも設置されて登山も便利になったようである。もう一つの中国で有名な山は山東省にある泰山だが、ニチメンはこの泰山に日本索道のロープウェイを設置している。その仕事をされたのが榎原さんである。矢張り黄山でのご苦労が泰山ロープウェイの仕事に繋がったのではないかと思う。1982年当時に黄山に登山した思い出は榎原さんのお陰である。



黄山にて 左側 藤田駐在員 中央 榎原所長 右側 筆者

上海駐在の当初の半年は単身赴任だった。その為、週末はよく駐在員で料理をした。当時の駐在員の宿舎となっていた上海錦江飯店中樓1251号室（ベッドルーム3室、会議室1室、食堂1室、リビングがあった）で料理をした。上海の名物料理と言えば上海蟹（＝チュウゴクモクズガニ）である。榎原さん、藤田君、中田で上海の街中の自由市場路上で生きた上海蟹を買って来て、宿舎で蒸して食べるようになった。男所帯の単身赴任者の台所には蟹を蒸すような調理器具が全くなく調理が出来ない。そこで1251号室の食堂の奥隣にホテル従業員作業部屋にホテルの各部屋で使用するガラスコップや湯飲み茶わんを消毒するガス湯沸式消毒器があったのを思い出した。この消毒器に買って来た生きた上海蟹を入れて蒸して食べた。翌日ホテル従業員（＝従業員）から「ガス湯沸式消毒器が蟹臭い、まさかとは思いますが蟹を茹でなかったか？」とクレームされた。どうも蟹を蒸した時に1～2匹蟹逃げ出したことが分かり、ホテル従業員に掃除の際に探すよう依頼して事務所に出勤した。事務所から宿舎に戻るとホテル従業員が脱走しまだ生きている蟹2匹を捕まえたと見せてくれた。蟹が脱走した原因は蟹を糸で縛らず茹でたため、蒸気の熱に耐えられず蟹が脱走したものと分かった。蟹を探してくれたお礼にそのホテル従業員に蟹をプレゼントすると大変に嬉しそうに家に持ち帰った。榎原さんとはその後、中



左側 榎原所長 右側 筆者
(撮影場所：上海錦江飯店中樓1251号室、日時：1980年秋)

国ビジネスで大変お世話になった。榎原さんはニチメンを退職後、母校の神戸外大で商業中国語の教鞭を取られ、また日本ビジネス中国語学会理事長としてご活躍されたが、惜しくも癌に倒れ永逝された。



水揚げされた陽澄湖産上海蟹
(写真出所：蘇州陽澄湖大闸蟹業界協会)



茹で上がった上海蟹 (写真出所：たびこふれ)

ここで当時の上海の様子を思い出してみよう。筆者の業務範囲は鉄鋼・電子電機・化学品・食料・繊維（大阪織質と大阪内地繊維）と守備範囲が非常に広がったことに加え総務経理とナショナルスタッフの労務管理も担当していたので非常に忙しかった。事務所の種々の支払いや駐在員の給与振込/引き出しも全て筆者の仕事だった。給料日は毎月20日であり、筆者自身が中国銀行上海支店（外灘にある）に出向いて、振込と現金の引き出しをせねばならなかった。当時は道路事情も悪く、事務所のあった上海錦江俱樂部から車で往復2時間弱、銀行での手続きに1時間と半日仕事になった。

工藤一彦所長（故人）に「済みません、今日は業務が忙しく時間がないので、後日銀行に行って給料支払いの手続をします」と報告すると、「また遅配か!」と良く文句を言われた。工藤さんにお聞きしたことによると、工藤さんの父上は医者で戦前はハルピンにいたが、関東軍が日本からの沢山の満州移民を置き去りにして敗走すると、工藤さんの父上は八路軍に徴用され従軍医師として勤務した。工藤さんは高校生までハルピンにおられたので、中国語は非常にお上手であった。また多趣味の方で、アコーディオンやバイオリンを嗜まれた。上海駐在の後、青島と広州に駐在されたが、広州駐在中に鼻血が止まらないとのことで日本で診察を受けた所、上顎洞癌と診断され、日本で手術・加療に努められたが、病に倒られ既に故人となられた。工藤さんとは上海でよく喧嘩もしたが、筆者にとって忘れがたい中国部の先輩の一人である。

扱、次に松村誠三さんのことをお話しておきたい。松村さんは四国徳島県のご出身で、若い頃には化学品本部肥料塩課にも在籍されたことがあるとお聞きしたことがある。大の阪神ファンが有名で、北京駐在時代にも駐在員と良く草野球をされておられた。また大の酒好きでもあり、夕方になると事務机の下の方から、ウィスキーの瓶が出てきて、アハハと笑いながら、ウィスキーを嗜まれておられた。筆者が上海に駐在している頃、余り仕事をされない工藤所長に不満が溜り、当時中国地区総支配人であった北京の松村さんにお電話をして、現状を報告、直訴したことがある。松村さんは大人（たいじん）で、「中田君、色々不満はあるだろうが、工藤君には工藤君の良いところもある。是非その良い所を見るようにしてやって欲しい」と諭された。それを聞いて筆者は、工藤さんとうまく付き合っていくと考え直した。松村さんのこの言葉がなければ、自分は八方塞がりでにっちも

さっちも行かなくなっていたのではと思う。また上海駐在終了前に筆者は中国関係の仕事を引き続き続けたかったので、当時中国部長であった松村さんに自分は出身の鉄鋼貿易本部ではなく業務本部中国部に戻して欲しいとお願いし、中国部へ帰任することになった。現在自分が中国で長く仕事をさせて頂いたのは、正に松村さんのお陰であり、松村さんには感謝しかないと思っている。松村さんはニチメン退職後、北京にあるニチメンが出資した物流会社の総経理として赴任されておられたが、帰国後誠に残念乍ら心臓病で長逝された。

次に、濱本益僖さんのことをお話ししたいと思う。前述の如く、1980年北京留学当初、濱本さんは北京所長をされておられた。1989年6月4日に北京で天安門事件が起きた。その時の中国部長が濱本さんであり、中国駐在員の一時帰国を東京で一手に引き受けられて実行された。このような大変な事件が起こったその翌年1990年に北京に赴任され中国総代表になられた。当時中国部で濱本さんの下で働いていた私も、濱本さんからの指示を受け、北京事務所で総代表助理（総代表付）として1990年8月3日に北京に赴任した。濱本さんとは中国部で部長と課員という環境で仕事をご一緒したこともあり、気心の知れた上司と北京で一緒に仕事が出来たことは大変幸せだった。当時筆者は中国総代表席の管轄する8店舗の予算と計数管理をやる傍らで、日本外務省の無償援助案件の仕込みと成約に向けて注力していた。濱本さんが在任中に貴州省農村改水整備計画（15億円）を受注し、同計画の完成祝いにご一緒に貴州まで出張、当時の貴州省張副省長と面談・会食したのを良く覚えている。その後、濱本さん帰任の後、高野千秋取締役と前田征雄常務が総代表に就かれた。

濱本さんはニチメンを退職された後、田崎真珠に再就職された。ある日、濱本さんから「田崎真珠が女子サッカーチームの実

業団チーム持っているが、なかなか強い選手がいなくて成績が上がらない。就いては中国の優秀な女子サッカー選手をスカウトしたいので手伝って欲しい」とのお話があった。それを受け、早速、北京市体育委員会に出向き、女子サッカー選手をスカウトしたいと申し入れた所、2名の中国人女子サッカー選手を田崎真珠に派遣することが決まった。その後、田崎真珠はこの2名の中国人サッカー選手の活躍もあり、実業団女子サッカーではかなり上位に食い込んだと聞いている。北京で人買いの仕事したのは、これが最初で最後である。その濱本さんも誠に残念乍ら癌で他界された。

筆者は北京に1995年7月28日に北京駐在を終え、東京本社食糧本部長付きとして帰任した。食糧本部に帰任することになったのには、竹村肇文食糧統括部長（故人）のお陰である。この経緯についてもお話しておきたい。中国部に在籍していた1988年に、松村中国部長の指示で、当時食糧本部の竹村部長が中国黒龍江省で進めようとしていたJICAの大豆試験栽培事業に協力することになり、竹村部長とご一緒に何度も中国黒龍江省へ足を運び、黒龍江省国营農場総局（現 黒龍江省農墾総局）の3つの農場（597農場、鉄力農場、克山農場）で搾油用大豆に適した大豆の栽培試験事業（JICA融資額2.5億円）についての交渉を纏め上げたことが食糧本部で仕事をするきっかけとなった。その後、前述の如く1990年8月3日に筆者は中国総代表付きとして北京に赴任した。

当時ニチメンは日本国際貿易促進協会の中国農業協力委員会の委員長会社であり島崎京一専務（故人）が委員長に就任されておられた。同委員会の目的は黒龍江省国营農場総局（黒龍江省）と新疆建設兵団（新疆ウイグル自治区）の2つの国营農場組織に日本政府の第4次円借款をつけることだった。この日本側の事務局としてワーク

されていたのが竹村部長で、筆者はこの案件の中国側の担当となった。同委員会ワーク結果、最終的に1997年黒龍江省国営農場総局に三江平原商品穀物基地開発計画として円借款（177.02億円）が供与された。その後、折しもニチメンが黒龍江省農墾総局傘下の建三江管理局の15の国営農場の農業機械リノベーションを目的として、第二次洪河農場案件（往復2,700万ドル）をスタートすることになり、竹村部長と佐藤三朗課長が東京本社で本件を担当され、筆者が北京で本件を担当した。大型の補償貿易ということもあり、中国國務院の承認を得ること及び中国農業銀行の履行保証を取得するのに大変な時間と労力が掛ったが、最終的には成約に漕ぎ着け、実行できた。以上のご縁と竹村部長のご尽力もあり、北京駐在から食糧本部へ帰任することになった。食糧本部の中国での大型案件を手掛けることが出来たのは、竹村部長のお陰である。竹村部長との出会いがなければ、黒龍江省でのビジネスを行うチャンスには出会わなかったと思う。竹村部長に感謝・感謝である。竹村部長も癌で60歳という若さで早世されたのは実に残念である。

もう一人紹介しておきたいのが緒方政治さん（故人）である。緒方さんは木材本部ご出身だが、その後、海外経理で活躍され、筆者は北京駐在の時に事務所で一緒に仕事をした仲間である。緒方さんは非常に冷静沈着な方で、北京店の経理・総務の仕事を淡々とこなされていた。緒方さんもニチメンの中国語学研修生の一人である。ご趣味は蝶々の採集で、新種の蝶々も海外で発見されたと聞いている。ニチメンを退職された後は、杭州にある日系企業に赴任され、その後帰国された。緒方さんも大変残念乍ら癌で早世された。2013年2月、筆者が取り纏め役となり緒方さんを偲ぶ会を開催、緒方さんの香港と北京の駐在仲間が集まって生前の緒方さんを偲んだ。

業務上ではあまり接点はなかったが、大阪中国部の與沢英五郎さん（故人）のことについても少し触れておきたい。今年5月に與沢さんの奥様からハガキで逝去されたとのお知らせがあった。奥様にお電話でお聞きした所、3月の初めにお腹が痛いと言ったので、近所の医者で検査した所、すぐに大きな病院で診てもらった方がよいとのことで、大阪大学医学部病院で検査結果、消化器の癌が見つかり、その場で入院された。開腹手術で癌の摘出を試みたが、既に可也転移しており、全ての癌を取り去ることはできなかった。その後、自宅の近くのホスピスで術後を過ごされたが、2020年5月3日に93歳で逝去されたとお聞きした。

與沢さんとは筆者が中国部に在籍していた頃、毎年春と秋の広州交易会でよくご一緒した。当時、広州交易会は春と秋にそれぞれ1ヵ月という期間で開催され、東京の中国部と大阪の中国課の人間が広州に出張、長丁場の交易会のネゴにあたった。当時の定宿は広州賓館であり、毎朝・毎晩の食事をご一緒することになる。各営業部からの出張者の通訳業務、定宿の確保、食事の準備、更には営業からの担当者が帰国した後の商談のフォローと成約を中国部からの出張者が担当することになる。毎年、この激務を與沢さんが大阪代表としてフォローされておられたのには実に頭の下がる思いである。

また何年か前に與沢さんが大阪から東京にお見えになり東京の中国部の後輩達と食事をする機会があった。その際にお聞きしたのは、今回の東京来訪の主目的は友人からの依頼で、中国の京劇の有名な役者である梅蘭芳（メイランファン）（*注3）の切手売りに来たとのこと。何と、この切手（＝下記左側、梅蘭芳舞台芸術小型シート）の売値は1枚で100万円だと伺ってびっくりした次第。梅蘭芳の切手は中国の金持ちのコレクターが血眼になって買い求める切手のようである。大昔、中国に出張され、

梅蘭芳の切手をお買いになったご記憶のある方は是非探して頂きたいと思う。



1962年に発行された梅蘭芳舞台芸術小型シート



梅蘭芳舞台芸術1962年（紀94）8種

最後になるが大先輩の住山忠雄さんについてもお話しておきたい。毎年の広州交易会に東京の中国部からは住山忠雄さんが毎回参加され、大型商品の大豆・小豆・ハチミツ等の中国糧油食品進出口総会社の食糧食品関係アイテムをご担当された。商談アポイント取得の為、交易会初日の交易会開幕と同時に交易会場の階段を駆け上がり、中国糧油食品進出口総会社のブースを訪問、アポイントの為の名刺配りをされていた。住山さんのお元気の秘密をお聞きしたことがある。住山さんは広州交易会で広州出張時に広州のハチミツ商店でハチミツとローヤルゼリーを購入、これをよくかき混ぜ、これを毎日飲んでしていると教わった。また住山さんが御若い時に『中村天風道場』（*注4）で修業をされ天風先生から、ブリル（=肛門）を閉めてと教わりそれを実行されているとのことだった。住山さんがニチメンに入社されるきっかけとなったのは、日

中輸出入組合の初代理事長にニチメンの南郷三郎社長が就任、1956年日中貿易協定の首席通訳を住山さんが担当され北京に随行され、これを南郷社長のお声掛けで40歳でニチメンに就職され、業務部東西貿易課（後に中国部に改名）で中国貿易を担当された。住山さんはニチメンの六代の社長訪中時の通訳を担当された。住山さんは確か70歳を過ぎてもニチメン中国部に勤務され、恐らく住山さんがニチメンの社員で一番長く仕事をされた方だと思う。その住山さんもお元気だったが誠に残念乍ら89歳で他界された。

筆者がニチメンの中国貿易でお世話になった8人の諸先輩についての思い出話を纏めさせて頂いた。ニチメンで中国ビジネス関係の諸先輩に出会わなければ、自分の仕事を全うできなかったと思う。諸先輩方に改めて御礼を申し上げて筆を置くことにする。

*注1）外貨兌換券（外匯兌換券、Foreign Exchange Certificate = 略称FEC）

中国政府が外貨を管理する為に1979年に導入（前年1978年に日中平和友好条約に調印）、翌年4月1日から流通し、1995年1月1日に廃止された紙幣（外貨兌換券）のこと。外国為替専門銀行であった中国銀行が発行し、外国人が観光や商用で中国を訪れ、外貨を両替する際に渡された専用紙幣であり、約15年間流通した。券種は1角、5角、1元、5元、10元、50元、100元（表記は圓）の7種類、表面には万里の長城等の中国国内の観光地、裏面には中国語と英語で使用上の注意が書かれている。表面のデザインは外国人受けするデザインになっていた。

*注2）黄山（こうざん）は、中国・安徽省にある景勝地。伝説の仙境（仙人が住む世界）を彷彿とさせる独特の景観から、古代から「黄山を見ずして、山を見たというなかれ」と言われ、数多くの文人が

の古谷野さん、寺井さんが出場しておられて懐かしさと共に奇遇に驚いたところです。

大会の成績結果は、入賞できず残念無念でしたが、イヤー長生きすると人生色々あるものですね。

平均寿命が延びたので喜寿を過ぎても心若々しく、五十数年前、日綿実業大阪本社ビルの裏庭で各部対抗戦の剣道をした時の叫び声を思い出して、これからも楽しんで行きたいと思っています。

富士山

石川丈山作

仙客來遊雲外嶺
神龍棲老洞中淵
香如紈素煙如栢
白扇倒懸東海天

仙客來たり遊ぶ雲外の頂き
神竜住み老ゆ洞中の淵
香はがんその如く煙は栢の如く
白扇さかしまに懸る東海の天

(七言 絶句)

[illegible]

會員寄稿文

メキシコ古代遺跡訪問記

芳賀信明

私は1972年の10月にヒューストンに赴任して以来、合計7年半ほどヒューストンに滞在しましたが、その間に3回メキシコ旅行に行っております。

1. テオチワカンのピラミッド

1973年に長女が生まれましたので、その成長を待って、1974年暮れから1975年正月にかけて第一回のメキシコ旅行に行きました。あれこれ、見学先を予定していたのですが、なにしろメキシコシティの標高が2000メートル以上ある高地ですので、娘が高山病症状に陥り早々に切り上げてヒューストンに戻ってきました。

この時の目玉はなんといっても、テオチワカンのピラミッドでした。首都のメキシコシティから北東約50^{キロ}の場所に位置するテオチワカン遺跡です。テオチワカンは紀元前2世紀ごろ造られた都市で、最盛期には約20万人を超える人々が住んでおり、下水道まで完備されていました。7世紀末には衰退し廃墟となってしまったこの遺跡は、アステカ族が見つけたときに規模があまりに巨大だったため、人間のものとは思えず

「神々の座所」という意味の「テオチワカン」と名付けられました。

テオチワカンの遺跡は、その中央を南北約5キロ、幅40mにわたって貫く「死者の大通り」がメインストリートとなっています。その周辺には「太陽のピラミッド」「月のピラミッド」「城塞」といった巨大なピラミッドや神殿群が無数に立ち並び、その総面積は約20平方キロという巨大なものです。

太陽のピラミッドは、高さ65m、底辺が225mのテオチワカン最大のピラミッドです。頂上の平坦な部分には、かつて神殿が立っていたと推定されています。頂上まで248段の階段を登りきると、ピラミッド遺跡群がぐるりと眺められ、壮大なスケールを感じることができます。(このあたりの説明はWikipediaの説明をお借りしました)これに上る階段はすごい急角度で45度位ありそうでした。

2歳の娘を抱えた妻は、とても上ることなどできないので、下で待っていることにして私と二人の息子だけで上ることにしました。ところが、意外なことが起こりました。

当時6歳と4歳の息子たちが四つん這いになって、ピラミッドをどんどん上りだしました。危ないからユックリ登れと怒鳴っても、聞こえないようで、猿のように物凄いスピードで頂上目指して登っていきます。転げ落ちたら大変なことになる、との親の心配をよそに、二人はいち早く頂上に達しました。

私もあとから、やっと頂上にたどり着きました。太陽のピラミッドの写真を添付いたします。



太陽のピラミッド



ウシュマルのピラミッド、急こう配の階段

2. ウシュマルのピラミッド

第二回目のメキシコ行は1977年くれから1978年正月にかけてのものでした。

この時の最終目的地は、当時新興リゾート地として脚光を浴び始めていた、ユカタン半島先端のカンクンでしたが、その途中で思いがけずに古代ピラミッドに出会うことになりました。

* Wikipediaから説明を抜粋してみます。

メリダの南方78kmの地点にあり、カンペチェへ向かうメキシコ的高速自動車国道

261号線で、メリダから110kmの地点にある。ウシュマルという地名は、オシュ＝マハアルと発音されたと考えられ、マヤ語研究者の間でその由来について論争があるが、コロンブス到着以前の古いマヤ語の名称と考えられ、「三度にわたって建てられた町」という意味である。

多くの観光客の目的地となるためにウシュマルの建造物の整備や復元にたくさんの労力が注がれる一方で、細々とであるが真摯な考古学的な発掘調査や研究がなされてきた。この都市の占地が行われた時代はよくわかっていないが、人口は、現時点では概算で2万5千人ほどと推定されている。今日目にするのできる大多数の建造物は、だいたい紀元700年から1100年の間に建てられたものである。

この時は、最初のメキシコ訪問から4年経ち、子供たちも成長してきましたが、なにしろピラミッドがテオチワカンのものに比べてもはるかに急峻で、怖くて登れません。ピラミッドの底辺のあたりをグルグル回って見物するのが関の山でした。写真を添付します。

3. チチェン・イツアのピラミッド

ウシュマルと同じ日にチチェン・イツアのピラミッドを訪れました。ここは均整の取れた美しさから言ったら、これまでのピラミッドより遥かに完成度が高いものでした。

マヤの最高神ククルカン（羽毛のある蛇の姿の神）を祀るピラミッド。基底55.3メートル四方、高さ24メートル（頂上の神殿部分は6メートル）。通称の「カスティーヨ」はスペイン語で城塞の意。「ククルカンのピラミッド」、「ククルカンの神殿」とも呼ばれる。大きな9段の階層からなり、4面に各91段の急な階段が配されていて、最上段には真四角な神殿がある。ピラミッドの階段は、4面の91段を合計すると364段で、

最上段の神殿の1段を足すと、丁度365段である。また1面の階層9段は階段で分断されているので合計18段となり、これらはマヤ歴の1年（18ヶ月5日）を表す。

このことから「暦のピラミッド」とも呼ばれる。北面の階段の最下段にククルカンの頭部の彫刻があり、春分の日・秋分の日には太陽が沈む時、ピラミッドは真西から照らされ階段の西側にククルカンの胴体（蛇が身をくねらせた姿）が現れ、ククルカンの降臨と呼ばれている。（Wikipediaより）

この時もその険しさに足がすくみました。なんとか家族5人全員が頂上を極めることができました。

一枚はガイドさんに撮ってもらった家族写真です。もう一枚はククルカンの頭で遊ぶ子供たちです。

4. ツーラ（Tula）の戦士像群

1978年に6年半のヒューストン生活を終えて、いったん帰国したのですが、3年後の1981年にヒューストンに合弁会社設立の話が煮詰まり、もう一度、約1年間ヒューストンに長期出張という形で赴任することになりました。

この時に、日本側で材料の鋼管の製造担当をしたのが大阪の丸一鋼管でした。丸一も若い駐在員が単身で赴任しておりましたが、色々の経緯は長くなるので省略しますが、1981年の年末から1982年の正月にかけて、二人でメキシコ旅行に行くことになりました。ところが、メキシコに到着早々に彼が猛烈な下痢に襲われ、ホテルから一歩も出られない状態になりました。

私はやむを得ず、一人で観光に回らざるを得なくなりました。あのテオチワカンのピラミッドも再度訪問しました。そして、第一回の家族旅行の時にどうしても行きたかったTulaの戦士像群を訪問することが出来ました。



チチェン・イツツア



チチェン・イツツア



ツーラの戦士像群

Wikipediaの説明を引用いたします。

トゥーラ・シココティトランは、メキシコ、イダルゴ州にある後古典期の遺跡。トゥーラとは、「城市」、「都市」とか「町」という意味だが、一般的にはトゥーラ・シココティトランのことを指す場合が多い。伝承上の「トゥラン」「トゥーラ」もこの遺跡のことを指していることが明らかな一方、トルテカ帝国の首都とする伝承があるが、全盛期は、10世紀後半から11世紀前半。ピラミッ

組みました。中国仏教の寺院はけばけばしく迷信に満ちていると見なされがちですが、これは繁華街にある観光名所としての寺院について言えることで、大多数の寺院の実態は例えば迷信排除おみくじも禁止で仏教の原理原則に忠実であることが改めて確かめられました。

この研究は学会や講演などいろいろな機会に発表し皆さんの認識を深めていただきましたが、それとは別に一般の方々の反応で意外だったのは全般的な問題として仏教書を読んでいても仏教用語がわかりにくくそこでつまづいてしまっていて仏教に対する理解がなかなか深まらないというお話でした。そこで本稿ではその原因となっている「音写と意識」の問題に絞って述べていただきたいと思います。

仏教はご存知のようにインドが発祥の地ですが、日本には中国経由で伝来しましたので、表現には主として漢字が使われています。漢字は表意文字ですから漢字一つ一つに意味があります。ところが、外国語が中国に伝わってきたときにそれに対応する言葉が中国語にない場合があります。これが日本ですと、カタカナやひらがながありますので、それらを使って音写で表現できるのですが、中国ではそうはいきません。中国は頑なに漢字を使います。その一方で漢字を使って意味を伝えることができると判断すれば意識をします。経典などではその両方がごちゃ混ぜになっていますので特に日本人には厄介です。例を挙げて説明します。

まず、肝心要の「仏陀」ですがこれは音写です。古代インドの言葉サンスクリットのBuddhaの意味は目覚めた人とか覚った人ですが、適切な中国語がないので音写で仏陀としたのです。因みに「仏」という字は日本製の漢字で、中国語では繁体字、簡体字どちらも「佛」です。「佛」は仏教が中国に入ってきたときに新たに造語されたも

のと言われています。

釈迦も音写です。お釈迦様は釈迦族の王子として生まれましたが、この釈迦はサンスクリットではŚākyaでこれを音写して釈迦としたのです。釈迦という漢字には意味がありません。また釈迦牟尼とも呼ばれますが、釈迦牟尼の牟尼はサンスクリットmuniの音写で意味は聖者です。したがって、釈迦族の聖者となります。尼は意味としては尼僧ですが、ここでは尼僧とは全く関係ありません。一方で尼僧に該当する中国語は比丘尼でこの場合の尼は尼僧の尼ですから、もう本当にややこしいです。因みに比丘はサンスクリットでbhikṣu、意味は乞食をする人、つまり出家して托鉢する人、従って僧侶を意味します。

般若心経の「般若」はサンスクリットの俗語paññāからの音写です。また菩薩はBodhisattvaからの音写の菩提薩埵を略して菩薩としたものですが、いずれにせよ音写です。このように仏教の表現にはインドの言葉を音写したものが非常に多く、一方我々日本人は漢字の意味にとらわれますので非常に分かり難くなっています。他に音写でしばしば出てくるものには、Amitābha「阿弥陀」、arhat「阿羅漢」、kāśāya「袈裟」、śarīra「舍利」、nirvāṇa「涅槃」、stūpa「卒塔婆」、pāramitā「波羅蜜多」等々があります。

さて、意識の方ですが、「因果」「縁起」「慈悲」「帰依」「解脱」「無量寿」「無量光」「布施」「如来」等々たくさんありますが、意識と音写を前後関係なく混ぜたものもありこれが厄介です。阿弥陀+如来、観世音+菩薩、般若+心経、梵+天、補陀落+宮、等々です。

それでは一つのインドの言葉に対して一つの中国語による音写または意識かというところではなく、これが幾種類もあったりして戸惑います。例を挙げて説明します。

まず、観世音菩薩ですが、別名は観自在

菩薩です。同一菩薩が異なった名前になっていますが、なぜこのような事態になってしまったのでしょうか。これは写本によって原語に二種類あり、また翻訳者の考え方によってその選択が異なったりしたことが原因と考えられます。原語はAvalokitasvaraとAvalokiteśvaraの二種類あり(なぜアルファベット表記なのかは後述)、真ん中あたり片方はaで片方はeとなっています。Avalokitasvaraの方は中国仏教史上最高の翻訳者として知られる鳩摩羅什(くまらじゅう)(Kumārajīva 漢人でなく西域の人)が採用して意識で、世の中の音を観る、観世音菩薩としました。音を観るといのはおかしいのですが宗教的神秘性が感じられたのか歓迎され定着しました。一方、これも中国仏教史上非常に有名な三蔵法師として知られる玄奘も翻訳しまして、こちらはAvalokiteśvaraの方を翻訳し同じく意識で、自在に観る、観自在菩薩と翻訳しました。理屈の上では観自在菩薩の方が勝っているように見られますが、実際には観世音菩薩または略して観音菩薩、さらに略して観音が圧倒的に広く使われています。しかし観自在菩薩の方も健闘しまして、かの有名な般若心経の中で用いられその名をしっかりと留めています。いずれにしても、観世音菩薩と観自在菩薩は同じ菩薩なのです。案外知られていませのでこの点も指摘しておきます。

(般若心経冒頭部分抜粋)

玄奘訳：佛説摩訶般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
蘊皆空度一切苦厄・・・・

鳩摩羅什訳：摩訶般若波羅蜜大明呪經

觀世音菩薩行深般若波羅蜜時照見五陰
空度一切苦厄・・・・

般若心経には実は更に多くの翻訳者があり、ちょっとマニアックになりますが、音写もありまして、阿婆盧吉低舍婆羅とか阿縛盧枳低湿伐羅なんていうのも実際に仏典

に出てきます。これでは一般的に使われないのは当然でしょう。

次の例は祇園精舎です。平家物語で「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」とあり有名ですが、その祇園精舎です。精舎は意識で僧侶の修業する建物のことですが、祇園は音写で、しかも略語なので複雑です。ある富豪がお釈迦様やその弟子たちに精舎を寄贈しようとしたましたが、それを建てる敷地の園林が必要です。そこでその園林の所有者であるジェータ太子から大金を投じて購入しますが、まずこのジェータが音写されて祇陀でその祇をとり、また園林の園をとって合わせて「祇園」となったのです。京都の祇園の由来はこんなところにあります。なおついでに説明しておきますが、諸行無常の無常とは、常が無いという意味で、つまり常に変わらない事や物は何もないということです。よく無常ではなく無情と勘違いしておられる方も時々おられますので説明した次第です。

また日本語でも音写の面白い例がありますので紹介しておきます。「日光」の地名の由来です。日光は世界遺産としても有名ですが、この日光が観音様のお住まいになるところを意味すると言われてもピンとくる方は少ないと思います。観音菩薩はインド南方にあるとされるPotalakaというところに住んでおられると言われていています。チベットの宮殿がポタラ宮と呼ばれている所以です。中国でも随所にポタラという名前に因むお寺が建てられましたが、ここで音写の問題がまた出てきます。中国ではこれを補陀落と音写しました。ところが日本人はこれをフタラと読み、次いでこれに二荒(フタラ→フタアラ)という漢字を当て、栃木県の男体山の別名として二荒山としました。そのうち二荒を誰かが音読みでニコウと呼んでしまいまして、それを聞いた人がニコウならニッコウ→日光にする方が美しいように感じ、もともとのPotalakaがとうとう日光に化けてしまったのです。

さてここで仏教經典の原語であるインドの言葉について若干ふれておきます。仏典に使われているインドの言葉にはサンスクリット語、パーリ語、マガダ語などがありますが、日本で引用される言葉にはサンスクリット語が多く、パーリ語は原始仏教や上座仏教（小乗仏教）の經典関連で出てきます。いずれも独自の表音文字が使われ日本では梵字と呼ばれています。ところが論文などでは梵字そのものは使われず、もっぱらアルファベットで表示されています。これはサンスクリット語やパーリ語の研究が最初はイギリス人によって始まったことによります。インドがイギリスの植民地だったころインド駐在のイギリス人裁判官がインド研究のために諸文献の解説に努め、サンスクリット語の全容を解明するに至ったのです。その結果、サンスクリット語は英語や特にドイツ語によく似ていることを発見、インドの言葉とヨーロッパの言葉が同根であることが確認されたのです。そして仏教經典も読み解かれ、仏教学がヨーロッパで始まり発展することにつながっていったのです。しかし梵字のままでは分かり難く、一方同じ表音文字としてアルファ

ベットへの転換が容易なので、研究にはアルファベットが使用されることになったのです。従って日本でもアルファベットで表示されていますが、これはあくまでも便宜上で、もともとは梵字なのです。従って、日本の仏教では梵語（サンスクリット語）、梵字、アルファベット、漢字の音写と意識、日本語の音読みと訓読み、ひらがなとカタカナが入り混じり本当に理解を難しくしています。日本で梵字が使われる機会は限られますが卒塔婆とか位牌の中などに使われています。

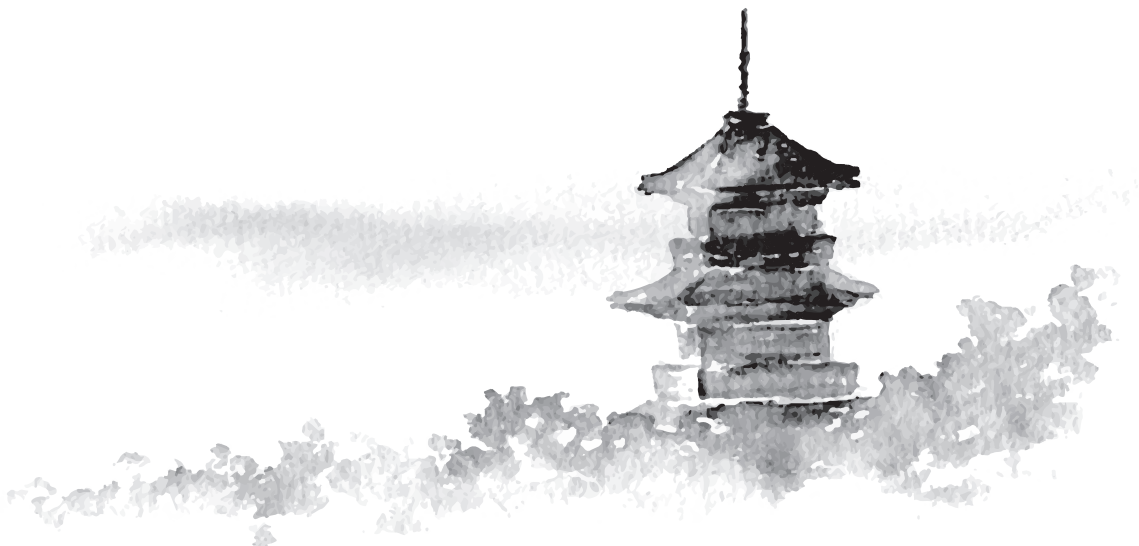
なお補足ですが、サンスクリット語が英語やドイツ語と類似している例として下記のような言葉があります。インドヨーロッパ語として一括りにされているのが良く解ります。

仏教では理念や思想の問題も勿論ありますが、本稿では仏教の理解を深める一助として「音写と意識」の問題に絞って述べさせていただきました。

多少なりともお役に立てば幸いです。

(了)

	サンスクリット語		ラテン語	ギリシャ語	ドイツ語	英語
母	mātr	मातृ	mater	mater	mutter	mother
父	pitr	पति	pater	pater	vater	father
私を	me	म	mihi	moi	mich	me



会員寄稿文

コロナ災禍の中での私のライフワーク

吉 本 邦 晴

人生の終幕期にかかり100年に一回のパンデミックのコロナ災禍に出会い、ウイズコロナそしてポストコロナの時代を送ることになりました。この状況を、“長く生き過ぎた事への災難”と考えるか、“貴重な体験”と喜ぶべきなのか...

人間が生まれた時に定まる“定命”は動かしがたく、与えられた命をしっかりと刻んでいくこと、そして85歳の人生を慈しみ、一日一日を感謝を込めて自然体で過ごすこと、これが今日の私の生き方です。

私はニチメン生活30年、第二の人生をゴルフ業界で20年、そして最後のラウンドで奨学金事業に携わって来ました。振り返る社会人としての人生は全て沢山の方々との出会いであり、そこから生まれて来た無数のドラマの積み重ねの日々でもありました。ご縁のあった数々の有能な友人、知人、同僚に恵まれ、支えられた幸運な軌跡の毎日であったように思われます。

最終ラウンドでの奨学金事業への参入は、全てのサラリーマン生活が終了した、今から7～8年前、70歳後半からのスタートです。その動機は、喜寿の歳を迎え、一期一会のご縁で過去にお世話になった方々への感謝と仏縁の思いを込めて四国88か所の歩き遍路を思い立ちその途次、何か形であらわす社会奉仕への想いに駆られ、ちょっとしたご縁から奨学金事業に加担することになり、現在に至っております。

その顛末については公益法人協会の機関誌に巻頭言として寄稿した内容をご覧ください。

私は昭和、平成、令和に生をはぐくみ、昭和では幾多の若者が戦争の災禍で無念な命を落として行く中、幸い私の世代は戦後

の困難から復興と繁栄の時代を謳歌、戦争の無い平和な時代を過ごすことが出来ました。そして今、令和の時代、COVID-19という災禍に見舞われる中で、今の若者たちは未来を見つめ果敢に生きております。彼らに対して幾ばくかの手助けとなり、次世代の若者を育てたいとの想いは皆さんも同じご意見かと思います。

今世紀初期のパンデミックであるコロナ災禍は、今後の人類の歴史に大きな変化をもたらすことが確実に予想されます。その時のグローバルな全世界の経済と社会の変革は想像を絶するものがあり、既にその兆候が身の回りで起こりつつあります。デジタル化経済への加速、仕事とライフスタイルの変化、グローバル力の異質化、倫理観の向上、不測の事態に対する日常の備え等々。このコロナ期から次の世代に生きてゆく我々財団の奨学金受給生の現在の修業形態は、オンラインと対面講義の二様となり、それぞれ知識の伝達の有利性や思考を深める授業の特異性等新しい体制を作りつつあります。学生たちは、それになじむべく今は手探りで最大の努力をしております。そして彼らはウイズコロナの厳しく且つ制約された生活環境の中で学業に励み、大きく変わりゆくポストコロナの未来を信じその兆候の表れているウイズコロナの日常に対処し、逞しく強かに毎日の生活を続けております。

私たちの奨学金は総合大学と服飾系大学及び専門学校を対象にしております。総合大学は学生に対するそれなりの支援体制を打ち出しておりますが、服飾系大学や特に小規模の専門学校にあっては財政的に厳しい経営状況に立たされております。その中、

学生への支援にも限りがあり、学生が生活費や学費を捻出するために多大なる努力をしている姿が浮かび上がって来ます。

しかしながら、自分たちに不条理に被さってくる幾多の社会的な試練を若さと未来への希望で跳ねのけて突進してゆくエネルギーと活力は、正に見上げたものです。目標に向かって困難を乗り越え突き進む姿はやはり若者が持つ特権かと、時にはこちらが鼓舞されます。

奨学金事業を立ち上げて今年で7年目、給付対象校とのパイプも出来、毎年50名余の奨学金給付生を積み上げて来ており、公益法人事業としての基盤も確立しました。今年は新しく、コロナ特別奨学金給付を企画し、10月に全国30校79名の学生に給付しました。留学生含め厳しい生活環境の中で勉学に励む次世代の学生たちに幾ばくかでも支援できればと考えております。今年度の奨学生に対しては、オンライン交流会と称してSNSを介した交流会を企画し、日頃の生活の厳しさや悩みを奨学生同士がお互

いに話し合える場を提供しております。

この事業は、今後も継続かつ更なる進化を求めて展開していき、後継者としてニチメンの元同僚岡崎謙二氏（財団の業務執行理事）と元自動車部の矢嶋正孝氏（財団事務局長）に引き継ぐことで、更なる内容の充実を図っております。

最後に、私を感じるこの仕事の難しさは、4000名余のパルグループの従業員が苦勞して稼ぎ出した原資（浄財）をどのように無駄なく、適切に、そして最も効果的に学生たちに給付していくかと言うことです。人生の半生を商社マンとして人から稼ぎ出すことに専念してきた私にとっては、これは想像していた以上に困難な課題であり、日々、試行錯誤しております。それでも、達成感を味わえるときは、真摯な若者の笑顔と噴き出してくる彼らの未来への活力に出会うときです。ここに生涯ビジネスの醍醐味があります。

85歳の人生はまだまだこれからです。



公益法人

2020
VOL. 49 No. 6

公益財団法人 公益法人協会

巻頭言

人の心、善意の一滴の広がり
若者の心に宿り、
未来への期待となる(公財) パル井上財団
理事 吉本邦晴

1962年の春、大阪中之島ニチメン本社ビルの地下で、オーダー紳士服のオーナーとして注文取りをしていた、井上英隆氏（現パルグループ会長）との出会いは正に一期一会の奇しきご縁でした。

私は学卒後商社マンとしての一步を、彼は既に学卒後4年の歳月を経て、起業家意欲に燃え、社会人として新しい事業を創設するための地歩を固めているときでした。

それから50余年、半世紀近く私は商社マンとしての人生を、彼は紳士服からスコッチ洋服店を立ち上げ、更なる事業の拡大を目指して幾多の困難を克服し、今年年商千数百億円の一部上場のパルグループ会社としてアパレル業界にその地位を確立しました。

丁度両者が人生の節目の年代になった8年前、井上氏は自らの人生訓“みんなの幸せ”を実現のために自分を育ててくれたアパレル業界への恩返しを思い立ち、その具現化のため“アパレル業界へ巣立つ若者への人材育成”を企図、これが奨学金事業へのステップインの動機です。

小さな財源でより密度の濃い奨学生の育成を考え、ユニークな視点での取り組み、

- 1) 年間30万円の給付型奨学金の支給
 - 2) 精神的サポートとしての奨学生相互の幅広い交流による、密度の濃い人材育成を目指す、
- この二本の柱を目標としました。

特に奨学生に対する精神的サポートに注力しておりますが、そのポイントは、奨学生の選定には総合大学及び

服飾専門学校の2年生以上を対象としております。

趣旨は、入学時は問題なく就学出来たが、一年目にして保護者の予期せぬ状況の変化（死亡、離婚、病気、失職など）により、本人が強い進学意欲があるにも関わらず学業の継続が難しい状況になった学生へ、原則一年間の給付を行います。従って奨学生は就学中特別な事情を背負っており、精神的な支援が必要になってきます。

具体的には相互のメール交換、交流会、学校との連携、年一回の合宿等、奨学生が一堂に会して相互交流が出来る舞台作りを行います。

奨学生の募集は多分野から行い（理科系、文化系の総合大学、家政系大学、服飾系大学、短期大学、専門学校そしてそれぞれの留学生等）受給生の出身とその学業内容は多岐にわたっており、一年間の相互交流は彼らの人生の最も重要な時期での人格形成に多大な影響を与えています、唯財団の使命は飽く迄交流の舞台作りであり、給付生が自ら有意義な人生を自分の力で作っていくことに力点を置いております。自分に課せられた厳しい運命をはねのけ巣立つべく、有能な人材が、次世代のアパレル業界を支えることを期待しています。さらにより良い人材育成のために、学校の教育方針を業界のニーズと合体するための産学協同の橋渡しも事業の一環として注力しております。

同時にパルグループ社4000人余の従業員もこの“みんなの幸せ”のオーナーの願いに共鳴して社会奉仕に参画しております。

人の一期一会の出会い、事業家の心に宿る社会奉仕への強い意志と思い、それを実現させるために、最小の経費と最大の効果を上げる、公益法人としての使命と運営、これらが合体して、人の心に宿る小さな一滴が花開き具現化し、次世代を担う一握りの若者へのささやかな支援が結実します。

そしてそこから生まれる有能な人材が、日本のアパレル業界の未来作りに貢献していくものと期待しております。

会員寄稿文

“コロナ禍と西欧文化”

園 山 春 一

コロナに虐められて約10か月、その間、コロナについてあれこれ考えた連れずれの思いをここに認めます。

筆者は、駐在員として21年間、中高生時代に5年間都合26年間ヨーロッパで生活しました。このコロナ禍が欧米で猛威を振るいアジア、就中、極東アジアでは抑えられているその理由は何処にあるのか、ヨーロッパでの経験をもとに自分なりの考察結果が以下の通りです。

実は、この彼我の差を考えると、そこに、欧米において何かこの災禍を抑えられる鍵が潜んでいるのではないのかと自問自答してみました。わたくしのような意見や考え方や反応が世界の各国政府や感染症対策機構やWHOやマスコミから聞こえてこないことはなぜなのだろうという疑問があり、世界は依然として西欧諸国に牛耳られ極東アジアを誉めたり、見本とすることを良しとしない社会なのかと憤慨しております。

以下は個人的見解ですが、読者の皆さんはどう思われますか？

コロナ感染状況の彼我の差

10月31日現在の感染者及び死者数の実態：

	感染者数	死者数
アメリカ	894万人	228千人
フランス	132万人	36千人
イギリス	96万人	46千人
日 本	10万人弱	2千人弱

感染者数と死亡者の多い欧米3国と日本を比較した数字です。これら数字は、日経新聞（10月31日付けに基づきます）。なお、日経は当初より感染者数の多い30ヶ国を

毎日発表していますが、現在、高位30ヶ国には中国、韓国、日本は含まれていません。人口が多いアジアが人口比率では圧倒的に感染者数も死亡者数も少ないのです。高位30ヶ国の中には、アジアでは、インド、パキスタン、バングラデシュ、フィリピン、インドネシアが入っています。

これほどの差がなぜ出るのだろうか？ また、それをなぜ欧米の国々は取りあげないのだろうか？

なぜ、WHOは、この歴然とした差をもって欧米の防止策に何か問題があったとして追及しないのだろうか？ 感染対策に何か役立つ処置などがこの実績から見いだせないのだろうか？ 世界中のマスコミは、なぜこの点の矛盾や問題点を取りあげないのだろうか？

そこで、わたくしはその原因は以下のような要因にあるのではと思っております。

欧米とアジア人のこれまでの自然への接し方：

彼らは、自然は克服できるもの、克服すべきものと捉えているが、アジアの人々は自然と共存し、自然を受け入れるものとして捉えているのではないのでしょうか？ 過去の感染症、ペスト、コレラなどすべて欧米でワクチンを見つけ、克服してきました。従い、今回のコロナも自分たちは克服して見せると粋がっているのではないのでしょうか？ アジアでは、いち早く自然の威力を認知し、LOCK-OUTをいち早く実施し、中国、日本、韓国などはそれなりに感染を抑え、上記の実績に収めました。この自然

に対する考え、受け止め方の違いが極東アジアと欧米の違いの第一の理由だと思います。コロナという自然が生んだVIRUSを制圧することを優先したか、とりあえず防止対策が第一と考えたかの違いです。

欧米と日本の教育の違い：

欧米諸国の学校教育も家庭での教育でも、個の尊重が徹底されます。日本では、集が個より重んじられます。わたくしの経験したフランスの中学校や高校の歴史授業の場合、教師がNAPOLEONはこのような人物で、このような実績を残したと言った授業を行うのは日本と同じですが、教師は、「わたくし自身はこのようにNAPOLEONを評価する」と自分の意見、考えを教科書の教材をさらに発展させたコメントをします。さて、試験となるとNAPOLEONについて独自の意見を述べて、この人物の評価を述べないといくらNAPOLEONがこの戦争に勝った、いつ皇帝の座についたかのNAPOLEONの偉業をいくら覚えていても評価の対象にならないが、日本では、記述式テストでないこともあり、年度やいくつの戦争に勝ったとかと言った実績の記憶を重んじるテストとなり、個の意見を求めないこともあり教育が記憶に重点を置いた歴史授業となり、歴史から個々人が何かを得るというより、何があったかのみ記憶する結果となる。

それは、一方は、集の教育となり、他方は、個を高める教育となり、成人となった際に物事に立ち向かう態度や考えに彼我の差が生じる。この差が、感染症の場合、一方は、マスクをする、3密を避けるなど対策を皆で当然のことのように入力されるが、他方は、種々様々な考えやマスクするしないは個人の自由だとか、個人が責任もって集まり飲み食いするのに政府からの規制は受けれないと言った基本的な態度の違いとなり現れ、それが現在の感染者数や死亡者数の違いに反映しているのではと思います。

動物系と植物系の違い：

よく日本では、動物系女性、植物系男性と言うが、欧米諸国は押しなべて動物系であり、ハグ、キス、握手と言った触れ合いがごく普通であり、アジアでは、頭を下げたり、自分の手を合わせるタイ式挨拶が主でありハグやキスなどはないことが彼我の差の一因であろうが、それがすべてではないと思います。

それよりも、個人主義が主要要因ではないでしょうか？

前述の歴史のテストの違いではありませんが、欧米人は運動会、学芸会、遠足を知らないし、学校教育の一環になっていませんが、アジアでは、小学校から高校までは実施され、スポーツや芸術や弁論など競い合い、仲間意識を持つ教育機会が詰まっています。欧米では、“集”としての行動を学ぶ機会がないため、国全体はおろか市や町や地方自治体の範囲でも”集“の行動はなかなかとれないし、政府や自治体からの指令や要望に対する反対意見が尊重される民衆の心理を生んでいます。

そうした心理が今のコロナの感染者数の実態に現れていると思えてなりません。

例えば、日本は1960-70年代町全体が空気汚染で、光化学やスモッグで悩まされたが国や自治体をはじめ日本全体での努力で克服し、少なくとも世界中で最も清潔な国になっていないでしょうか？これは、日本人一人一人が責任を感じゴミのポイ捨てを止め、だれもが家の周りを掃き清め、町の中に散るゴミを拾い集めているからではありませんか？

パリの街には、年間でたばこの吸い殻が2トンあるといわれ、あれだけ世界に誇れる詩情あふれる街にごみが散乱し、犬のふんはところ狭しと蒔かれています。これは、公衆衛生観念が欠けているだけでなく個々人の行動に他人が関心を示さず、“集”での行動がとれないからだと思っています。

と申しますのは、1966年当時、ニューデリーのスンドルナガル（社宅のあった居住地で『美しい街』という意）の社宅でお父上と起居を共にし、コックに粗末な日本食もどきを作らせ（お金がなかった訳ではありません。食材が手に入らなかった時代です）まさに食べかけたころ、社宅の門前で「団扇（うちわ）太鼓」が聞こえてきます。使用人たちが『グルが来た、グルが来た』と叫びながら、戸外に出てグル（導師、お坊さんのこと）を迎え入れます。グルは薄汚れた柿色の法衣（ほうえ）をまとい、頭陀袋（ずだぶくろ）をかけ、手に団扇太鼓、頭に布きれの帽子を乗せ、素足にゴム草履すがた。

ベアラ（家内を仕切る男の使用人）、料理人、掃除人、庭師兼門番らが跪いてグルの草履に額をすりつけ、グルは一人一人の頭を掩手して慰めの言葉をかけ儀式が終わりました。

野村さんがグルに『お上人さん、どうぞこちらへ』と声をかけ、長いすに座らせる。グルは『おーい、野村。そこの若い（私のこと）。何か食わせろ、お腹すいた』。そして私たちが食べようとした夕食を見て、『ああこれか！俺、あした大使（日本大使）のところに行って何か仕入れてくるよ』と宣うた。

このお方は、ニチメンを専務で辞められ、財産の一部を奥様と息子さんに分け、残りすべてを帰依している『大日本山妙法寺（法華宗の一派）』に寄進し、妙法寺がお釈迦さんの眠るインドのラジギル近くに建立した日本寺に修行僧として入山された石橋鎮

雄・元専務さんでした。

翌日、石橋さんは「おーい、川西（昨夜名乗って互いに名前を知った）うまいもん手に入れたぞ。日本酒も一升瓶仕入れてきた。大使からせしめてきた。大使は『お前、生臭坊主』と言いながら出してくれた。遠慮いらんから食べて、飲んでくれ」と。そしてお父上と私は石橋グルから逆にごちそうになりました。

後で野村さんから伺いました。当時、日本政府の高官らはニチメンと石橋専務に大きな借りがある。こうしてニチメンが三菱商事、三井物産、伊藤忠、丸紅、住友商事らに伍してインドの円クレ商いに肩を並べられるのは、専務の現役時代のお陰であると。当時ボンベイ店に勤務されておられた太田川努さんの話では、『ビルマ黄変米事件※』というロッキードに匹敵するような世間を騒がす事件があって、ニチメンは石橋さんが最高責任者として当局の調べに自分一人で責めを負い、3カ間の拘留でも毎日団扇太鼓で明け暮れしていた由。他人の名前一切出さず、検事側も根負けして釈放されたとのこと。このため胸をなでおろした人たち数知れず。社内でも社外でも関係者の名前が表にならなかったと。

石橋上人はニューデリー店にときどき顔を出され、冗談半分の説法の中で、スンドルナガルの裏手の大きな川（ジャムナ河のこと。ガンジス河に匹敵する聖なる川）は西方十億土の浄土につながっており、こちらの岸（此岸）から屍の灰を水面に撒き、西方のあちらの岸（彼岸）にうまくたどり着けば極楽の門に入ることができる。ただ七日間ごとの閻魔様の審問があり、七回すなわち四十九日（中陰）を全うすると満中陰になり、極楽に入る資格を有するとの私の俗的理解です。お父上もこんな話を上人から何度も聞かされていると思いますので、きっと今ごろ『ほなら先行くは。あっちで待ってるさかい、晏如してついて来なはれ』などと特有の語りでおっしゃってるのでは



と、胸に熱いものがこみ上げてきます。
(後略)

野村バラサブとは、私が入社して5年目に海外に出た最初の上司です。殊の外思ひ出深い方でした。

－。－。－。－。－。－。－。－。－。－

こんな話を野村さんの七回忌を控えて、当時のインド店事情に詳しい長谷川洋さんに語ったところ、「俺がカルカッタ店に勤務していた時分、石橋上人はときどき眞保支店長(当時)の社宅に顔を出していたよ。あの人は『鶴ヶ嶺』の後援会長もなされていたよ」と言われ、「鶴ヶ嶺」といえば相撲巧者ではあったが最後は西関脇で引退した。現役引退後「井筒親方」として、また息子三人を関取にした父親としても知られ、息子たち「鶴嶺山」「逆鉾」「寺尾」、もよく知られたお相撲さんでした。「鶴ヶ嶺の後援会長」とは恐れ入りました。石橋専務にこんな隠れた一面もお有りだと驚き入った次第です。私の知る石橋専務は、インド人もビックリのグル(立派な導師)です。でも「生臭坊主」の一面もあって清濁併せ呑む太っ腹の人物とお見受けしました。どなたか石橋専務の現役時代について精悍なお姿を語ってくれる方がいらっしゃれば幸いです。

※(ニチメン100年史から)
食糧部(1946年9月発足)

戦前からビルマで精米所を直営し、戦時には米、雑穀の輸入実績をもっていた。戦後の食糧危機を打開するため、米国からの援助物資としての農産物の大量輸入が始まり、当社は貿易庁の業務代行を担当することになった。・・・(中略)・・・

また、1950年1月、ビルマに経験の深い眞田重治社員(のち取締役)をラングーン駐在員として派遣し、ビルマ米の買い付け

輸入にあたらせた。当時、日本はまだ食糧が不足しており、政府は戦後初めてビルマ米の輸入に踏み切り、5万トンの輸入契約がビルマ政府との間で成立した。

当社は第一物産株式会社(現三井物産)、協和交易株式会社(現三菱商事)と共にその積み出し業務代行商社に指定され、眞田社員は現地でビルマ政府と船積みその他一切の交渉、手続きを行った。同年10月、食糧部は東京支店内に本部をおき、穀類、食品、油脂の3課制をしいて、輸入食糧以外の分野にも進出した。

黄変米事件

1954年7月16日、厚生省は輸入米から黄変米を発見、600トン配給停止にした。翌日の新聞にこのことが報じられると、「安全度」をめぐる論争が起きたほか、国会で政府の輸入米管理の責任が追及されるなど波紋が広がった。27日の朝日新聞には、「東京の8つの倉庫に分散保管中のビルマ米9,300トンの一部645トンから、黄変米が発見された」ことが報じられた。

30日には農林省と厚生省が、黄変米の毒性基準を引き下げて配給することを決定したため、婦人団体の反対運動が強まり、政治問題に発展した。

この黄変米事件で、当社の石橋鎮雄専務が、ビルマ米輸入責任者として国会に呼ばれ、野党議員から厳しく追及された。汚職の疑いをかけられて、3カ月近くの取り調べを受けたが、容疑は完全に晴れた。

会員寄稿文

山頂からの絶景：男体山 中禅寺湖 戦場ヶ原 尾瀬ヶ原

奥 村 睦 夫



男体山山頂(2486m)、高さ3.6mの大剣あり(2012年に再建) ②男体山山頂から中禅寺湖、対面に④の杜山

* 二荒山神社参拝料(500円)納め、登山口から標高差約1212mの直登を約3時間半かけて登る。



③中禅寺湖湖畔から「幻想的な湖面に浮かぶ男体山」



④杜山(1829m)からの中禅寺湖・男体山



①②③④⑤が撮影地点

⑤戦場ヶ原からの男体山：雪中歩行訓練(ラッセル)＝軽アイゼン、スパッツ、ストック、...

* 戦場ヶ原：上野国の大百足(赤城山)と下野国の大蛇(男体山)が戦って、大蛇が勝ったとか...

* 日光？：補陀落山(ふだらくさん)⇒二荒山(ふたらさん)⇒音読みして"にこう"⇒当て字で「日光」

日光地域の他の登頂済みの山々⇒ 日光白根山:2577m 五色山:2379m 太郎山(男体山の長男):2368m
 高山:1668m 鬼怒沼(湿原):2030m 赤薙山:2010m 釈迦ガ岳:1795m 鳴虫山:1103m 半月山:1753m
 未踏峰だが今後挑戦する ⇒ 女峰山(男体山の奥さん)、大真名子山、小真名子山

山頂を極めた者が楽しめる……

2018年9月(一泊2日)天候不良 → 燧岳(ひうちだけ):2356m 山頂は霧深し、写真撮れず

2019年9月(一泊2日)天候良 → 尾瀬ヶ原:海拔約1400m 至仏山(しふつ):2228m



① 至仏山 ⇨ 尾瀬ヶ原・燧岳:2019年9月



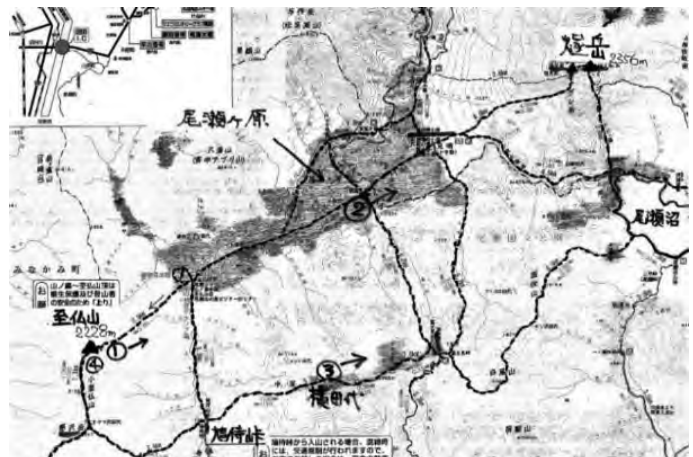
② 尾瀬ヶ原1400m → 燧岳



③横田代1820m(湿原、池塘、草紅葉)→燧岳



④ 2019年9月、至仏山頂:2228m



「黒龍会」開催さる

竹 内 可 能

去る令和2年6月28日(日)午後12時より、旧ニチメン農薬OB有志などによる「黒龍会」が、大先輩、故島崎京一氏ゆかりの中華料理店「黒龍」(在、東急田園都市線たまプラーザ)にて、開催。

この日の「黒龍会」は、長引くコロナ禍による閉塞状態からの脱却を願うとともに、偶々、日本火薬(株)に処を得ていた当会員の橘行雄君が、目出度くも同社副社長に昇任された祝賀をかねて催されたもの。

もともと「黒龍会」は生前の故島崎氏がリタイア後、長く親しく旧ニチメン農薬OB有志諸兄との歓談の場として、よく用いられてきた店「黒龍」に因んで付けられた名前である。



写真後列左より(敬称略)、斎藤、津曲(旧日本火薬)、吉羽、伊地知、滑川
前列左より 牧野、箕作、竹内、橘、鈴木

NMC（ニチメンマンドリンクラブ）のご紹介

入 江 隆 史

ニチメンにマンドリンクラブという音楽クラブがあった事を、皆さんご存知でしょうか？

クラブの創設は1962年ですので、創設58年の歴史があります。今は27名の部員がおり、最低月1回は渋谷の音楽スタジオに集まり、練習をしています。

NMCは1962年に機械部におられた井端和夫さんがマンドリンとギターの合奏を愛好家10名ほどで近三ビルの食堂で、演奏を楽しんで始められたのが最初でした。

その後、同じ機械部におられた与儀治さんを中心に1963年にニチメンの子会社に在籍されていた元明大マンドリン倶楽部のコンサートマスターをされていた野田弘氏のご指導を受けて徐々に管楽器、アコーディオン、打楽器、ベースも加わり、マンドリン・オーケストラとなって1965年に第一回の演奏会をブリジストン・ホールで開催しました。

第四回目の定演からは、場所を観客定員700名の東京都勤労福祉会館大ホールに移し、定演を実行しながら、その間療養所や老人ホームの慰問演奏や結婚式でのBGM演奏などの活動を幅広くしてまいりました。

現在の保有演奏曲目数は200以上あり、日本民謡・クラシック・歌謡曲・ラテン・軽音楽・映画音楽・童謡など、幅広い分野の曲を演奏して楽しんでいます。

最近ではニチメン以外の参加者が過半数を超え、多彩な技能をもったメンバーも参集して各方面からの呼びかけがかり、忙しく、また楽しく活動を続けています。

ところで皆様、ニチメン社歌をご存知ですか？ 正直私もこのクラブで演奏するまで、社歌は知りませんでした。♪ 歴史かがやく 幾星霜～♪ 機友会などのニチメン関係の演奏会場で、たまに演奏していますので、知らない方の為に歌詞を載せておきます。

ご参考までに直近の活動内容をご紹介します。

2016年	2月21日	山の手ロータリークラブ	代々木オリンピック青少年センター
	7月5日	青山ロータリークラブ	青山ダイヤモンドホール
	10月2-3日	千葉での合宿	
	10月15日	機友会	アルカディア市ヶ谷
	11月21日	慰問	筑波メディカルセンター
	12月17日	クリスマス会	相模原 保育園
2017年	5月25日	山の手ロータリークラブ	キャピトルホテル東急
	6月22日	品川ロータリークラブ	高輪プリンスホテル
	10月14日	機友会	アルカディア市ヶ谷
	12月6日	東京ライオンズクラブ	早稲田ライオンズクラブ
2018年	2月20日	ウーベンチュール	懇親会
	10月13日	機友会	アルカディア市ヶ谷
2019年	5月16日	山の手ロータリークラブ	キャピトルホテル東急

10月12日	機友会	アルカディア市ヶ谷
2020年 2月7日	懇親会	TJKプラザ
9月10日	NMC演奏会（中止）	けやきホール
10月3日	機友会（中止）	アルカディア市ヶ谷
12月17日	山の手ロータリークラブ	キャピトルホテル東急

第 八 回 定 期 演 奏 会



ニチメン社友会の皆様の中で楽器の演奏を一緒に楽しみたい方や演奏を依頼されたい方は気軽にお声をかけて下さい

東京山の手ロータリークラブ



浜金谷での合宿

「音楽は和なり」の古賀政男氏の色紙



機 友 会 で の 演 奏



観光旅行先にて



練習場にて



ニ チ メ ン 社 歌

作詞：大下 廣子、作曲：伊木 幸子

- | | |
|---|---|
| <p>1. 歴史かがやく 幾星霜
 七つの海に 雄飛して
 わが綿業の いしずえを
 築きし牙城 げんぜんと
 見よ分銅の 旗のもと
 光さんたる わが日綿</p> | <p>2. 幽冥ときに 世をおおい
 試練の嵐 猛るとも
 固きわれらの 団結に
 商こん いかで屈すべき
 起て分銅の 旗のもと
 力つくさん わが日綿</p> |
| <p>3. 行け万風に 帆をはらみ
 波とうをこゆる この闘志
 開く商路の 希望のせ
 いま洋々の 門出せん
 ああ分銅の 旗のもと
 永遠にはえあれ わが日綿</p> | |

相模原のクリスマス会



千寿閣での反省会



大塚ウーベンチュールでの懇親会



「俳句の会」いろは句会

佐 藤 英 二

「いろは句会」も、本年10月に第371回を終了し、息長く継続しています。

この半年は新型コロナウイルスの影響で集合での句会開催が出来ず、「ネット句会」という形式でメール交信による句会となっていますが、会員各位作句意欲は健在です。

俳句に少しでも興味のある方、初めてみたいと思っている方、ぜひ新しく仲間になりませんか？(老若男女問わず大歓迎致します。)

従来は各自の自薦による作品3句を投稿しておりましたが、今回は6句を以下の通り御披露致します。(氏名は50音順)

満開の桜ばかりが静かなり
梅雨の蝶そっと葉陰に雨宿り
陽翳りて日傘の匂ひ曇みたり
菩提寺の遠くなりたる盂蘭盆会
雨音の消えて何時しか虫時雨
太陽を仰ぎて暫し大嘘

宇治田薫風

古民家の簞笥階段桜散る
蚕豆やぼんぼんぼんと茹で上がり
万緑の景を深める潦
昭和史やまた読みかへす秋の宵
参道のどんぐり拾ふ和服の子
節分会豆一粒の重さかな

久保田悦子

早や九年（くとせ）東北の地に春巡る
「もういいかい？」桜の蕾我に問ふ
校庭に子らの声なき五月晴れ
母の日や遺影の脇に花一輪
また巡る語り継ぎたし原爆忌
法要の読経かき消し喪主くさめ

佐藤 英二

やはらかに心も伸びよ雑煮餅
はくれんの蕾ほぐれて幹に影
花木蓮ひとひの日差し包み取る
青空に真白き富士や花の冷え
松林湧き出る響き蝉しぐれ
長き夜やうとうとと聞く深夜便

下川 泰子

初鏡否応もなく老い進む
暮れ泥む（なず）む庭の微光や濃山吹
川波に光あふれて水温む
ポスターに志村けんゐる夏芝居
コスモスのあるとも見えぬ風に揺れ
初霜の朝日に光る石灯籠

福島 有恒

春昼や湯島聖堂築地塀
芯削る小刀の先梅雨じめり
手花火や両のペティキュア青色に
ジェット機の音して今朝の野分晴
虫鳴くや読み返す文傍らに
何処より移築の館冬薔薇

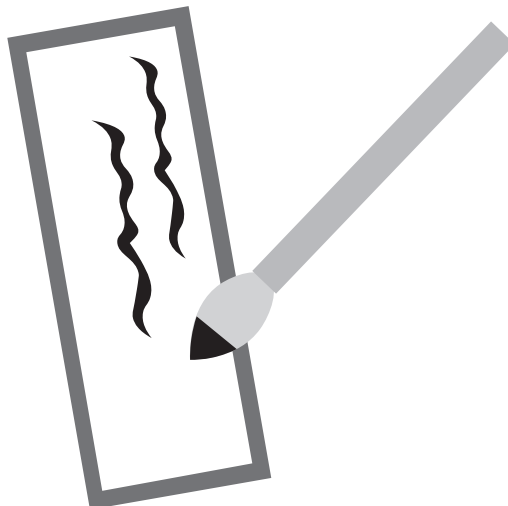
藤野 徳子

首傾げ脈取る女医やヒヤシンス
この人を好きになりさう夏料理
白日傘いつもより濃き紅をひき
ひぐらしや母の手紙の誤字脱字
エプロンで柿受く妻の真白き歯
俯かず振り返らずに枯木道

堀部 暁

木の芽和へ酒の取り持つ永き仲
大地の気泡立ち放つ栗の花
空白のままの手帳や梅雨近し
石灯籠千年杉の涼しさよ
羽織るもの取りに戻るや今朝の秋
冬三日月切り裂く村や進む過疎

山田珠真子



訃 報

(前会報報告後～2020年11月7日判明分になります)

ニチメン東京社友会

※非会員

	氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享 年
1	※佐 治 眞 二	機 械	2017年1月	83歳
2	※土 田 博	船 舶	2018年5月2日	69歳
3	※三 鼓 喜一郎	織 維	2019年12月17日	81歳
4	北 村 俊 夫	機 械	2020年3月27日	96歳
5	宇津木 長	総 務	2020年6月23日	87歳
6	※岩 橋 宜 之	鉄鋼貿易	2020年7月2日	79歳
7	※蒔 田 保 見	機 械	2020年7月15日	82歳
8	中 谷 勝	非鉄金属	2020年7月23日	82歳
9	※若 原 哲 夫	プラント	2020年9月14日	73歳
10	園 山 春 一	業 務	2020年11月3日	81歳

ニチメン大阪社友会

※非会員

	氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享 年
1	四 方 正 汎	木材	2020年7月9日	88歳
2	市 村 祐 計	機械	2020年8月11日	90歳
3	角 信 武	金沢支店	2020年8月17日	78歳
4	秋 山 統	人事	2020年9月8日	85歳
5	高 木 市 郎	鉄鋼	2020年9月11日	96歳
6	辻 井 準 一	機械	2020年9月26日	95歳
7	田 中 務	役員室	2020年10月29日	86歳
8	田 中 三 郎	運輸保険	2020年11月4日	95歳

ご冥福を、お祈りいたします。合掌



会 長	石原 敬資				
副 会 長	新藤 孝				
監 事	大羽陽一郎	蛭田恒美			
世話人代表	奥村 睦夫				
世話人	青木 聡弥	入江 隆史	北川 幸雄	木津奈緒子	
	近藤 厚子	丹下 薫	中田 龍彦	梶山 俊次	
	森田 淑子				

Nmm

世話人氏名				所属	電話番号	世話人氏名				所属	電話番号
青木	聡	弥	人事			入江	隆	史	合樹		
大羽	陽	一郎	機械			奥村	睦	夫	木材		
北川	幸	雄	機械			木津	奈緒	子	運保		
近藤	厚	子	情シス			新藤		孝	財務		
丹下		薫	紙パ			中田	龍	彦	食料		
蛭田	恒	美	燃エネ			榊山	俊	次	鉄鋼		
森田	淑	子	紙パ								

[illegible]

社友会へのご希望・ご連絡、新規加入希望者のご紹介、訃報（会員・非会員・現役）、社友会事務所（飯野ビル8階）使用、お問い合わせなど、上記世話人の誰でも結構ですので、お気軽にご連絡ください。

【編集後記】

まずは、ご寄稿の皆様にあつく御礼申し上げます。今号は、新型コロナ禍の影響で中止になった総会関連記事（10数ページ）がない為、多くの方々からご寄稿をお願いし、何とかまとめあげる事ができ、ホッとしております。

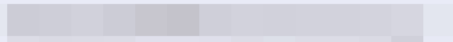
幾多の艱難辛苦を乗り越えて人生を生き抜いてきた皆さまは、経験した事のない新たな試練の真っ只中におられますが、“塞翁之馬”、“禍福糾縄”のごとく次はきっと良い事があると信じ、まずはコロナ禍の早期終息を願いつつ、自らの命を守り、「齢を重ねると心の拠りどころである昔の仲間との出会い」を楽しみに、次期総会、各部門OB会などお互いの無事を確認しあいましょう。

広報チームよりのお願い：

新年賀詞交換会の中止の伴い、次号（30号）も紙面を埋める為に皆さまからの多数のご寄稿をお待ちしております。

会員相互の情報提供、随筆、エッセイ、珍譚奇譚、書評、同好会・同期会・OB会ニュース（開催予定、開催報告）、アーカイブス写真（各種会合、仕事関連、課外活動等）等、以前の各号の掲載内容を参考にされ、ご寄稿いただきますようお願い致します。

一方、ホームページの「ふれあいの広場」欄に、①「旅行」②「花や景色」③「読書感想文」④「温泉情報」⑤「健康」⑥「趣味」⑦「美味しい食べ物の店や食べ方」の7つのジャンルを設けておりますので、内容をご覧の上、随時ご投稿ください。

- 投稿文送り先、問合せなど ⇒ 
- 会報次号（30号、2021年6月1日発行予定）へのご寄稿の締め切り
⇒2021年04月30日（金）

（奥村 睦夫）

ニチメン東京社友会

〒100-8691 東京都千代田区内幸町2-1-1
飯野ビルディング8F

会報発行人：石 原 啓 資

編集担当・広報チーム

リーダー：奥 村 睦 夫

メンバー：入 江 隆 史 中 田 龍 彦

印刷所：有限会社 関 内 印 刷